

第12回 自主公開研究発表会

研究の足あと

乳幼児期から始まる生きる力の根っこ育て



令和4年7月2日(土)

学校法人倉吉幼稚園

認定こども園 倉吉幼稚園

第 12 回倉吉幼稚園自主公開研究発表会

期 日：令和 4 年 7 月 2 日（土）

開催方法：オンライン開催

テーマ：「乳幼児期から始まる生きる力の根っこ育て」

〈日 程〉

- | | |
|-----------------|---|
| 9 : 00 | 待機室開設 |
| 9 : 30～10 : 15 | オンデマンドによる公開保育
(足あそび・お口あそび及び 2 歳児～5 歳児から選択視聴) |
| 10 : 20～10 : 50 | 研究実践発表
(以降リアルタイム配信) |
| 11 : 00～12 : 00 | 講演会
演題「足の成長と靴のお話」
講師 早川 家正 氏（日本教育シューズ協議会 理事長） |
| 13 : 00～15 : 00 | シンポジウム 「子どもにとっての“足”と“歯”とは」
コーディネーター
日野 彰則 園長（倉吉幼稚園）
シンポジスト
早川 家正 先生（講演会講師）
松田 隆 先生（園医・まつだ小児科院長）
森本 英嗣 先生（園歯科医・森本歯科医院院長） |

は じ め に

オンラインという形ではありますが、11 回目の開催から 3 年越しの 12 回目の自主公開研究発表会にこぎつけました。ご参会のみなさま並びに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

乳幼児教育は未来への投資という気持ちで日々子どもたちと向き合ってきました。幼稚園教育要領総則の中で「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成を培う重要なもの」と謳われている通り、私たちの仕事は、子ども一人ひとりの生涯を通した「生きる力」の広くて堅い土台づくりのお手伝いをするものと捉え「乳幼児期の生きる力の根っこ育て」というテーマを園全体で共有してきました。

本研究は、その柱のひとつである「丈夫な身体をつくる」という窓口から「土踏まずの形成と下あごの形成」をトピックにして平成 19 年から取り組んできました。その歩みは拙いものでしたが十余年の歳月の積み重ねは、少しずつ言葉にして伝えていけることが増え「土踏まず」と「下あご」が「体幹」を通じて相関性を持っていることを実感することになりました。その背景には第一線でご活躍の先生方に支えていただいたことがあり感謝をお伝えしなければなりません。

こうして 11 年間つながってきた本会は、コロナ禍という事態を受け 2 年間の開催中止という状況となりましたが、この間も令和 2 年度版・令和 3 年度版の研究集録を発行し続けました。社会状況にかかわらず目の前の子どもたちは成長・発達を続ける存在であること、そして乳幼児期の生活や経験はとりもなおさずその後の生涯の大きな土台となることを念頭に置いた時、止めてはならない歩みであることを改めて認識しました。

令和元年度来となった本会は、3 年にわたり停滞していた本研究の再発信の場として捉えています。今一度これまでの歩みを見つめ、振り出しとそのプロセスを再確認することを通して、本研究が保護者の皆様と共に在ったことや各分野の専門家の皆様に背中を押してもらいながらつないできたものであることを歴代と現在の保護者の皆様をはじめこれまで本研究に携わっていただいたすべての皆様に感謝と共にお伝えすることができればと考えています。また、ご参会いただきました皆様には“未来からの使者”である子どもたちを共に支えていく者として本会が共感と共有の場になりますことを祈念します。

令和 4 (2022) 年 7 月 2 日

理事長 米村 秀昭 園 長 日野 彰則

～ 目 次 ～

第Ⅰ章	倉吉幼稚園の乳幼児教育・保育・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1	始まりの始まり・・・・・・・・・・・・・・・・	2
2	教育構想図・・・・・・・・・・・・・・・・	3
3	研究主題への取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・・・	4
4	自主公開研究発表会等の概要・・・・・・・・・・・・・・・・	5
第Ⅱ章	取り組みの実際・・・・・・・・・・・・・・・・	7
1	“土踏まず形成”の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・	7
2	“下あご形成”の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・	17
3	個の育ちからみえてきた変容・・・・・・・・・・・・・・・・	23
4	家庭・地域との連携を目指した取り組み・・・・・・・・	25
資 料		
1	園が目指す“個の育ち”に盛ってきた《視点》について	29
2	紙上対談・・・・・・・・・・・・・・・・	38
3	追加データを含めた一覧・・・・・・・・・・・・・・・・	43
4	取り組みのベースにしているマップ等・・・・・・・・	44

乳幼児期から始まる生きる力の根っこ育て

～ “土踏まずと下あごの形成” を目指して～

第Ⅰ章 倉吉幼稚園の乳幼児教育・保育

1 始まりの始まり

そもそも、本研究に取り掛かったきっかけは、「園医健診風景の“ぐらぐら”姿勢のオンパレード」であり、直立姿勢の保持の難しい子どもたちが多いことに危惧を覚え、園医であるまつだ小児科院長からは、「土踏まずの未形成」が大きな要因のひとつであることをご示唆いただき園医さんと意気投合し、そのねらいを「専門家とのネットワークの活用による乳幼児期の四肢調整力の育成に視点をあてた取り組み」と「そこから広がる言葉と心の育ちを願った取り組み」を描いたものとしてスタートした。

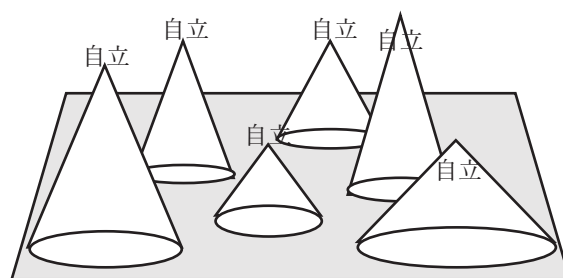
本格的な取り組みとなったのは、平成20年度の文部科学省教育改革推進モデル事業による推進であった。まず、最初に手を付けたことは「プロジェクトチームの立ち上げ」であり、園医・園歯科医・靴業界・体育指導員・管理栄養士に本園職員を構成員とし、専門的知見に乏しい我々の力量では及ばない背中押しをいくつもしていただいていた。このことは、園内だけの取り組みに終わらせない継続的で外部への発信を伴いながら取り組みの大きな推進力となったと捉えている。また、このモデル事業に伴う補助金は、足型測定器・万歩計、遊具や屋上広場の充実、専門家の招聘等に充てられ、250万円の補助金枠のうち179万円を支出し、取り組みの検証軸となる諸測定の礎を築いてきた。

本研究のスタートから十余年が経過し、2年越しの自主公開研究発表会の開催に安堵する一方、この間に起こった多くの未曾有の出来事は私たちの不安を煽り、先行きも不透明と感じるばかりですが、目の前の子どもたちは待ったのない成長を遂げていく日々です。私たちはそこに本研究を進めていく視点と「子どもたち一人ひとりが持つマップ」に“その子らしい塗り込みとマップそのものをどんどん広げていく作業がしたくなるものかどうか”という視点で、上記の測定と測定の間に仕掛けを投げ、遊びを配しその姿を追ってきた。

また、本研究の内容が本園内だけにとどまらずより多くの子どもたちに届いていくことを願い、外部への発信も積極的に行ってきた。他園での足型測定や小学校の指定上履きの見直し、専門家による小学校への靴履き出前授業、倉吉市の「くらよし子育て応援ぶっく」への靴選び項の掲載、本研究にご賛同いただく保育施設による土踏まず形成を目指した取り組み等へ少しずつではあるが広がりを見せてきている。このことは、本研究に共感していただき、各進学先の小学校で発信してくださった卒園生の保護者の皆様の力が大きく寄与していると感じ、改めて自らの足元を固めていくことにもなった。

「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」と言われる通り「幼児期はゴールデンタイム」であることを実感し、その子らしい“成長・発達”のお手伝いを続けていけることに使命と面白みを感じながらの研究推進である。

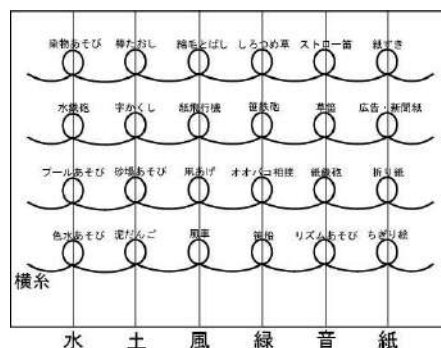
2 教育構想図



子ども一人ひとりの多様で広大なマップがこの円錐一つひとつであり、子どもの数だけ様々な形状の自立に向けた営みとしての円錐が林立している。この円錐を俯瞰したイメージが左の構想図である。子ども一人ひとりをこのように見つめその変容を見届けるという保育者自身のマップでもある。

上図は本園の日々の営みを可視化したもので、子どもの「自立」を中心に据え、子どもをとらえる視点としての領域や本園の教育課程、活動を配置し、さらに「遊びは学び」という考え方を基盤にしている。子どもの一人ひとりの生活や遊び、活動を「自分をつくる仕事」として捉え、子どもも保育者も「意識してすること」を増やすこと。「自立」に向けた道のりの様々な道案内役として背中押しをする者として、いつもここに立ち返りながらの保育展開に心がけることを共通理解してきた。

また、この構想図の外輪（花びら）となる部分には「縦糸の活動あそび」という構造図があり、外輪にある縦糸の遊びの素材に「意識してすること」を増やすという動きを加えることで遊びを紡ぎだし実践していき、その紬目が多く、細かいほど広く、しっかりとした編み物になっていくという考え方を示したもので、本研究の推進においてもここから実践に至る遊びの創造がなされている。



土台となっているのは「幼児教育は自立に向けた支援・援助」という考え方であり、さらに小学校教育現場の経験ある元園長の「学び方は生き方」という教育観であり、成長・発達の途上にある子どもたちの生活（人生）はこれから先もずっと続いていくもので早期の手立ての必要性からの構築となった。

(1) テーマ「乳幼児期の生きる力の根っこ育て」

(2) テーマの具現化に向けた構想に持つ四つの柱

①「丈夫な身体をつくる」

・「土踏まずと下あご」の形成を目指して」の研究推進～専門家を巻き込んで～

②「脳を鍛える」

・SI あそび ギルフォード博士の知能構造理論に基づく知育教材の展開

・自分をつくる仕事 教育構想に基づき、子ども一人ひとりの力のとりこぼしをしない教育展開

③「五感力を育てる」

- ・自然体験活動 打吹山をステージとした保育展開と稲作・野菜作りの農業体験や牛舎体験を軸とした労働を伴う農業体験等

④「感性を培う」

- ・“輝く大人との出会い”事業 各界の第一線で活躍されるプロとの出会いをコーディネート

＊人間は３歳までに得る知識や知恵や能力など本当に目覚ましいものがあり、その後の６０年間で獲得していく量に匹敵する。《目からうろこの学びのひとつである。》

(３)「全職員が子ども一人ひとりの担任」とう共同体による教育・保育の展開を志向する。

(４)「遊びを通して」ということを乳幼児期の成長の基礎基本として位置付ける。

＊「遊び学び」という考え方に「群れて遊ぶことの大切さ」という視点を加え、乳幼児教育のあるべき姿や目指すものを探り続ける。

(５)園舎内外から打吹山山麓一帯と田園地帯への飛び出しと園を応援していただく地域の関係者や第一線で活躍するアーティストとの積極的な交流に努める。

３ 研究主題への取り組みについて

モデル事業を契機に、園医との共通の“足裏の発育”という課題意識を基に以後毎年「子どもたちの足型の測定」を実施してきた。運動量がカギを握ると考えていたことから「万歩計の携行による運動量アップ」も導入し、同様に並行した測定の実施がメインの取り組みでのスタートであった。それをもとにした医学的見地からの分析で、子どもたちの環境の一つである“あそび”に「より形成要素を含んだ内容の提示や創造」が可能になると共に、そのことの追跡から「土踏まずの形成」への見方・育て方の方向性が見えてくると考えることで少しずつ取り組みに広がりや深まりを持たせてきた。また、同様に「下あごの未発達」も歯科健診で“歯列やう歯・咬合等”で指摘され続けている点であった。気になりながら関係性の理解は勿論のこと取り組みの方向性を見つけることが出来ずにきたところであった。

そこで、園医や専門家とのプロジェクトチームを編成することで、より専門的に子どもたちの側に立った取り組みが果たせると考えた。この取り組みを通して「土踏まずの形成」が体力や運動能力の総合的向上へ、「下あごの形成」が咀嚼力の向上等や望ましい食習慣の体得を望んでいくことができるのではないかと考えた。園医をはじめ専門家の方々の指導のもとに家庭との連携を深めつつ、運動を含めた遊びと食習慣の向上という視点での導入を図りながら言葉の発達にも関心を寄せ続けることが、子どもの心身の発達に寄与できるものと考えてきた。これら２つの形成を窓口にすることで、教育活動の軸足が強固となり、活動の広がりが生まれ、心身ともに健全な子どもたちを育成していくことにつながると考えての取り組みである。

(１) 仮説と現時点での評価

- ① “土踏まずの形成”の取り組みを通じた遊び込みは、子どもたちの体力・運動能力の向上につながり、健康で根気強い子どもを育成していくことになるであろう。

＊検証軸のひとつである体力測定の傾向に大幅な向上は見られないが、体力測定を意識した遊び込みが少しずつ苦手な領域の克服につながっていると捉えている。

- ② 下あごの形成”の取り組みは、歯列や噛む力の問題をはじめ、子どもたちのもつ発達課題を少しずつクリアしていくことになるであろう。

- ③ 家庭の連携を通したこれらの取り組みは、バランスのとれた心身の発達という面で、子どもの暮らしの変容を多く見届けることになるであろう。

＊取り組みの家庭への発信は、見事に子どもたちの靴を理想的なものに変容させてきた。保護者と問題を共有しながら進めていくことの大切さと意義を実感している。

- ④ 基盤としてあった当園教育課程に準じた諸々の活動と“土踏まずと下あごの形成”の焦点化した取り組みが、子どもたちの健やかな身体によりよい生育となり、それらが子どもたちの豊かな心と言葉の育成につながるであろう。

＊子どもたちの待ったのない成長・発達に本研究を絡めてきたことは、子ども一人ひとりの変容の姿をドキュメントすることで検証の上にのせてきた。このことは今後も大きなテーマのひとつとして継続していく。

(2) 内 容

- ① 「あそびの見直しと創造」に視点を当てた“土踏まず形成”を目指した取り組み。
- ② 食育やお口遊びを通した「噛む力や理想的な歯列」に視点を当てた“下あご形成”を目指した取り組み。
- ③ 園医をはじめ専門家の指導助言をいただきながら家庭との連携を通した取り組み。

(3) 目指す姿

- ① 目指すのは職員一人ひとりの“創意工夫を込めた遊びの場の提供力”と“意識した基礎基本の力の獲得の場の設定力”である。(子どもの姿に確かめられる“遊び学び”)
- ② そういった環境をくぐる子どもたちの姿に「生き生きとした豊かな言葉」と「夢中で遊び込む様子」をたくさん見届け続けることが一番のねらいであり、願いである取り組みにしたい。(“生きる力の根っこ育て”の積み重ね)

4 自主公開研究発表会等の概要

年度	内 容	講 師
H20	◆文部科学省教育改革推進モデル事業を受けての研究の取り組み ○専門家と幼稚園職員によるプロジェクトチームの立ち上げ ○172万円の補助金による足型測定器・万歩計等の購入	
H21	◆第1回自主公開研究発表会 6月13日(土) ○保護者を含めた参観を対象にした公開保育 「自立を目指した園構想」 園長 西田 直美 ○ミニシンポジウムとワークショップ	金城学院大学 教授 吉村 眞由美 氏 園医 松田 隆 氏 NPO法人未来 理事長 岸田 寛昭 氏
H22	◆第2回自主公開研究発表会 6月12日(土) ○保護者を含めた参観を対象にした公開保育と講演会 演題「足の成長物語」～幼稚園時代はゴールデンタイム～ 講師 阿部 薫先生(新潟医療福祉大学准教授) ○ミニシンポジウムと阿部先生による相談会 ○翌13日(土)阿部先生による希望者相談会	新潟医療福祉大学 准教授 阿部 薫 氏 園医 松田 隆 氏 NPO法人未来 理事長 岸田 寛昭 氏
H23	◆第3回自主公開研究発表会 6月11日(土) ○保護者を含めた参加者を対象にした公開保育と講演会 演題「足の成長と靴のお話」 講師 吉村眞由美先生(金城学院大学教授) ○ミニシンポジウム	金城学院大学教授 吉村 眞由美 氏 園医 松田 隆 氏 NPO法人未来 理事長 岸田 寛昭 氏

H24	◆第4回自主公開研究発表会 6月9日(土) ○保育公開及び講演会 演題「足の障害と靴」 講師 内田 俊彦先生(医学博士・整形外科医) (オーソティックソサエティー理事長・整形外科医) ○ミニシンポジウム	オーソティックソサエティー 理事長・整形外科医 内田 俊彦 氏 園 医 松田 隆 氏 NPO法人未来 理事長 岸田 寛昭 氏
H25	◆第5回自主公開研究発表会 6月8日(土) ○保育公開及び講演会 演題「母と子のための足と靴の新情報」 講師 阿部 薫先生(新潟医療福祉大学教授) ○ミニシンポジウム	新潟医療福祉大学 教授 阿部 薫 氏 園 医 松田 隆 氏 ウオーキングライフマイスター 岸田 将志 氏
H26	◆第6回自主公開研究発表会 6月14日(土) ○保育公開及び講演会 講演「身体が 心が 嬉しくなる幼児活動」 講師 柳本 有二先生(神戸常盤大学教授) ○ミニシンポジウム	神戸常盤大学 教授 柳本 有二 氏 園 医 松田 隆 氏 ウオーキングライフマイスター 岸田 将志 氏
H27	◆第7回自主公開研究発表会 6月13日(土) ○保育公開及び講演会 演題「私の原点」 講師 荻原 健司先生(ノルディック複合金メダリスト) ○ミニシンポジウム	ノルディック複合金メダリスト 荻原 健司 氏 園 医 松田 隆 氏 NPO法人未来 理事長 岸田 寛昭 氏
H28	◆第8回自主公開研究発表会 6月18日(土) ○保育公開及び講演会 演題「子どもの足と靴と健康」 講師 古賀 稔健先生((株)アサヒコーポレーション) ○ミニシンポジウム / 足の相談会	株)アサヒコーポレーション 古賀 稔健 氏 園 医 松田 隆 氏 NPO法人未来 理事長 岸田 寛昭 氏
H29	◆第9回自主公開研究発表会 6月10日(土) ○保育公開及び講演会 演題「下肢の障害と靴との関係 ～足サイズと靴サイズの大切さについて～」 講師 内田俊彦先生 (オーソティックソサエティー理事長・整形外科医) ○ミニシンポジウム / 足の相談会	オーソティックソサエティー 理事長・整形外科医 内田 俊彦 氏 園 医 松田 隆 氏 一富士フードサービス 管理栄養士 福浦 亜紀 氏 ウオーキングライフマイスター 岸田 将志 氏
	◆園内研修会 8月24日(木) ○演題「いい足づくりへの心づかいのあり方」 ◆原田碩三先生を迎えて職員研修会 10月23(月)・24日(火) ○足の測定方法と実測 ○演題「靴選びで子どもの足・姿勢・歩行・言動等を矯正」 ～大きすぎる靴が諸悪の根源～	日本教育シューズ協議会 早川 家正 氏 片山 智幸 氏 兵庫教育大学名誉教授 原田 碩三 氏
H30	◆第10回自主公開研究発表会 6月9日(土) ○保育公開及び講演会 演題「家庭・学校・地域の連携を足育てにつなぐために ～靴教育の果たす役割～」 講師 吉村 眞由美先生(早稲田大学人間科学学術院 招聘研究員・靴教育学者) ○ミニシンポジウム / 足の相談会	早稲田大学人間科学学術院 招聘研究員 吉村 眞由美 氏 園医 松田 隆 氏 ウオーキングライフマイスター 岸田 将志 氏
R1	◆第11回自主公開研究発表会 6月8日(土) ○保育公開及び講演会 演題1「子どもの足の成長と靴に必要な機能」 講師 阿部 薫 教授(新潟医療福祉大学大学院 保健学専攻長兼義肢装具自立支援学分野長) ○講演会及びフロアを巻き込んだの二人+1対談 演題2「子どもから大人への架け橋～足の機能と靴～」	新潟医療福祉大学大学院 教授 阿部 薫 氏 園医 松田 隆 氏
R2-3	※コロナ禍により中止【R2・R3共に研究集録～コロナ禍による中止を受けて～発刊】	
R4	◆第12回自主公開研究発表会 7月2日(土) ○オンラインによる公開保育及び講演会 演題「足の成長と靴のお話」 講師 早川 家正先生 日本教育シューズ協議会理事長 ○シンポジウム「子どもにとっての“足”と“歯”とは」	日本教育シューズ協議会 理 事 長 早川 家正 氏 園 医 松田 隆 氏 園歯科医 森本 英嗣 氏

第Ⅱ章 取り組みの実際

1 “土踏まず形成”の取り組み

足型測定や歩数計測による記録を残していくことは、子どもの身体の変容の記録ということだけにとどまらず、研究推進に則った実践の有効性をはかる数値や映像として、また、他の記録との相関性をはかる物差しと、実践のエビデンスになるものとして大切に扱っていきたいと共通理解してきた。しかしながら、「相関関係」を言い当てることの難しさに今以て四苦八苦しているのが現実である。一人の子どもが育つには様々な要素が絡んでいることを痛感するとともに、様々なチャンスが好ましい成長への支援機会にもなることを考えると・・・いつか“土踏まず形成”と“運動量の多少”が影響し合っていることへも行きつくのかもしれないと感じ合っている。この取り組みの始めから“靴の存在”が大きいことも認識し“靴履き指導の日常化”を目指してきた。そんなねらいに迫るために取り組んでいる具体的な活動のポイントを発信することで”途切れることのない心身の変容“を家庭と共有することで子どもたちの確実な成長へ寄与することになるのではと考えた公開を計画し続けたい。

足あそび	〈足裏マッサージ〉 	土踏まず形成を目指した足あそび。取り組みの中から多数のあそびが生まれてきている。保育部の子どもたちには足裏マッサージを取り入れ、子どもたちが「気持ちいい」「たのしい」などの気持ちを感じながらスキんシップを図り、情緒の安定や信頼関係を深めていくことを大切にしている。「クルクル、ポン！！」など抑揚のある声掛けをし楽しく行うことでリズムの面白さと気持ちよさで子どもたちに笑顔が見られている。	0 ～ 2歳
	〈竹踏み〉 	幼稚園部の子どもたちは、毎朝 10 分間の足あそびタイムを習慣にしている。足裏を刺激したり、足指を意識して動かしたり、体幹を育てたり、踏ん張ったりなどの遊びはもちろん、発達に応じて遊びが変わっていくような遊びもあり、日々楽しんでいる。	3 ～ 5歳
園庭あそび	〈飛び石〉 	固定遊具や足あそび遊具（ゆらゆら橋・一本橋・飛び石・ボルダリング）などで足指を使い、足裏からは様々な刺激を受けている。砂場のやわらかさ、地面の温度、斜面の滑りやすさ、でこぼこ感などを感じ、身体のパランスを取りながらあそんでいる。	1 ～ 5歳
園外保育	〈かけっこ〉 	年間を通して打吹山を遊び場とし自然の移り変わりや生き物との出会いにより子どもたちの感性を育みながら丈夫な身体づくりをねらう。足を踏ん張って斜面を登ったり、芝生に寝転んだり、自然を身近に感じながらあそびに没頭していく。	0 ～ 2歳

	〈打吹山山頂を目指す〉 	以上児になると足腰が逞しくなり、急な斜面やでこぼこ道に挑戦することができるようになっていく。長谷寺・正面展望台・打吹山頂上など、気候や年齢に合わせて子どもたち自身がそれぞれの場所で自然の楽しさを知ることが出来ることも魅力のひとつである。	3 ～ 5 歳
ノルディックウォーク	〈白壁土蔵群を歩く〉 	年長児を対象に「まっすぐな体感」での歩行ができる体づくりを目指しての取り組みである。園医さんからいただいた”ノルディック・ポール”を活用し、打吹公園や町の中をお散歩する経験を積み重ねることでポールに親しみ、五感を開きいろいろな発見を友だちと楽しんでいる。	5 歳
体育あそび	〈平均台〉 	「幼児期に身に付けたい動き36」を意識しながらバランスの良い力の獲得の為に毎週火曜日に行っている。体力測定との相関性を踏まえ各学年伸ばしたい力を考え様々な内容に取り組んでいる。	2 ～ 5 歳
あそびの王様	〈風船バレー〉 	鳥取県が主催している体力向上プログラムの一環として行われている遊びである。たくさんある種目の中から保育者が考え、子どもたちが楽しみながら取り組んでいる。	4 ～ 5 歳
靴履き指導	〈靴履きの実際〉 	子どもたちが「正しい履き方」を知り、日々の靴履き場面において、一人ひとりの姿を確認していくことを大切にしている。年度当初は「はやく外に出て遊びたい」の思いが強く、「テープをしっかり止めない」・「かかとトントンをしていない」まま玄関からとび出してしまう姿が多く見られていたが、靴履き指導を各クラスで行いながら、履き方のちがいを体験することで、「転ばないため」「足が痛くならないため」「はやく走れるようになるため」など子どもたちに「正しい履き方」が身についていくよう指導している。 小さい学年においては保育者が手を添えかかとはが支えられているかをチェックしたり、足が靴の中で動かないようぴったりと合わせたり、テープをきちんと止めるなど、毎日の生活の中で丁寧に関わりながら身につくよう大事にしている。	1 ～ 5 歳

サンダル履き	〈鼻緒を足指で挟む〉 	サンダルを履くと1分間に50回以上足の指の曲げ伸ばしをすることになり、土踏まずの形成を促し、浮き指を改善していく。本園ではもも組2歳児からサンダル履きを始め、履き始めの不安定な歩行状態から徐々にしっかりと鼻緒を掴むことが出来るようになっていく。個人差はあるが、成長の姿がみられている。	2 ～ 5歳
万歩計	〈万歩計装着時〉 	園生活の中での運動量を知るためのひとつの手段として、午前10時から午後2時までの4時間携行している。個々の運動量を知り、保育活動の見直すことや足型測定による土踏まず形成率との相関を捉えることをねらいとしている。	3 ～ 5歳
体力測定	〈体支持持続時間〉 	子どもたちの体力運動能力の変容を知るために、春と秋の年2回行う。バランスのいい身体づくりを考える指標ともなっており、春の測定結果を受け、どのようなあそびを展開していくのがいいのかを考えながら体育あそびや普段のあそびに取り入れていくことを目的としている。	3 ～ 5歳
足型測定	〈足型測定中〉 	足型測定器により足型写真および土踏まずの形成状況を定期的に（5・9・2月の年3回）測定する。土踏まずの形成率の推移を追い、実践の有効性と万歩計による運動量との相関を検証する。また個別の測定記録から浮き指や足指の角度など個々の幼児の生活実態に切り込み、改善に向かうための記録として活用することを目的としている。	3 ～ 5歳

（2）取り組みの過程で生まれてきた足あそび

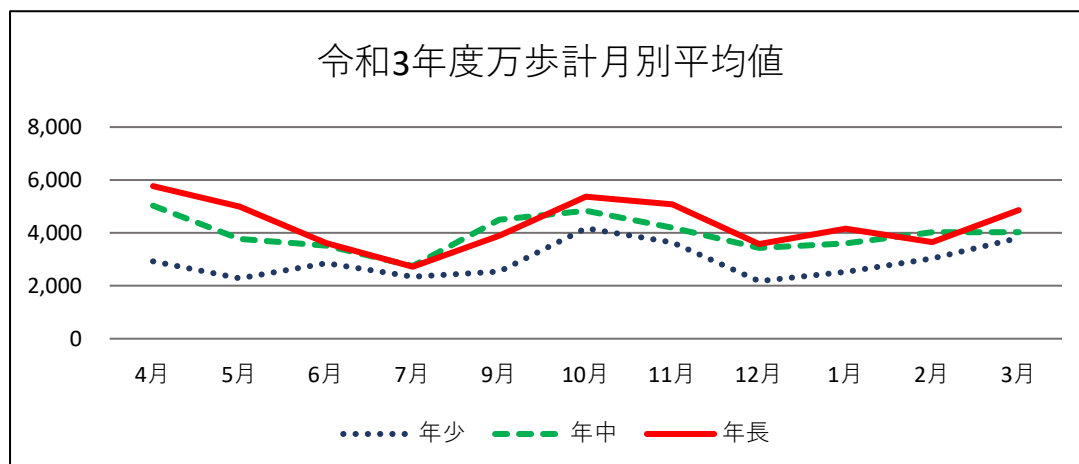
（カテゴリ） A：足裏を刺激する B：足指でしっかりと蹴り出す C：足指を開閉する
D：体幹を育てる E：足全体を使って踏ん張り体重を支える

あそびの名称	カテゴリ	内 容	写 真	対象年齢
足指ふれあい マッサージ	A	自由遊びや午睡前に足裏をもみもみ、すりすりマッサージすることでリラックスを促す。		0歳～
でこぼこマッ トあそび	A D E	圧縮袋に風船やボール、卵のパックを詰め、その上をバランスを取りながら歩いたり、四つ這いで歩いたりする。		0歳～
リトミック	C D E	音楽に合わせてそれぞれの動物になりきって楽しむ。		1歳～

サーキット	A B D	飛び石、でこぼこ平均台、フープ、ロープなどを使って、足裏を刺激しながら渡り歩いたり、ジャンプしたりする。		1 歳～
おすもう ごっこ	D E	片足をあげたりしゃがんだりと四股踏みの真似っこ。友だちと押し相撲で足を踏ん張る。		1 歳～
坂道・傾斜登り	B E	体でバランスを取りながら、急こう配の坂道を登る。		2 歳～
竹踏み	A C	大小様々な大きさの竹を踏むことで、足裏を刺激する。		2 歳～
お手玉 けんけん	A C D	足指でお手玉をつかみ上げ、そのまま片足けんけんで進む。		3 歳～
8 角登り棒	C E	年齢によって使い方は様々である。低年齢児は周りからの昇り降りを楽しむ。年齢が上がるにつれて真ん中の棒を足指や腕の力を使いながら昇り降りすることを楽しむ。		3 歳～
けんけん跳び	B D E	並んでいるフープを片足でジャンプする。		3 歳～
かつぽん	D	足指に力を入れて、バランス感覚を鍛える。		3 歳～
縄跳び	D	跳び縄を使って正しい姿勢を維持しながら、繰り返し着地するときに体全体でバランスを取りながらあそぶ。		4 歳～
一本足下駄	C D	身体のバランスを整えながら楽しむ遊び。鼻緒をぎゅっと握りながら歩くことを目的としている。		4 歳～
くまさん ジャンケン	C D E	互いに後ろ向きで前かがみになり手をつき、股の間から顔を覗かせてジャンケンする。		5 歳～
おしりスリ スリゲーム	B	おしりを床につけた状態で足の指先を使って床を掴み、前に進んだり後ろに下がったりして相手の帽子を取り合うゲームである。		5 歳～

(3) あそび・活動の傾向をデータからみる

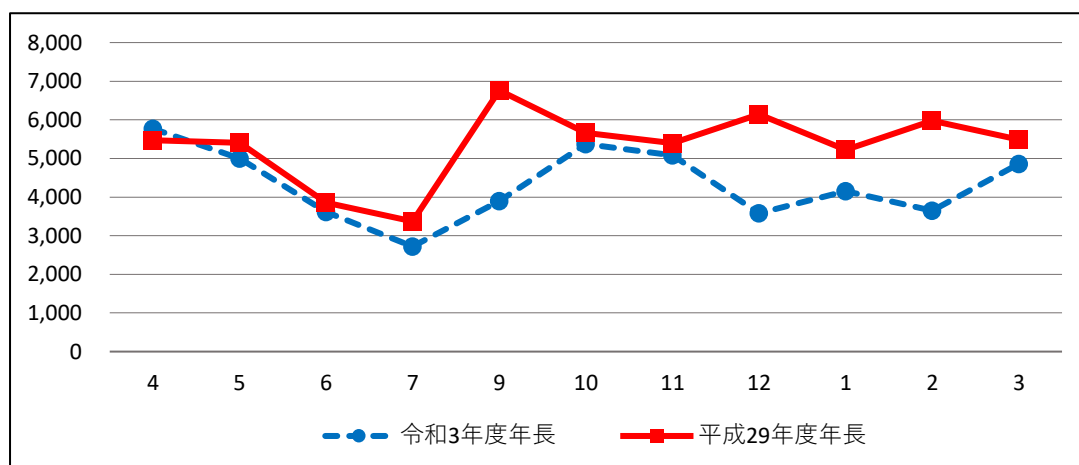
① 3 歳児・4 歳児・5 歳児の万歩計月別平均値



- ・万歩計の携行の仕方や種類、歩幅の差などはあるが、季節や園行事などに運動量が大きく左右されていることがわかる。
- ・年間を通して打吹山の四季折々の自然の移り変わりや生き物に触れる園外保育、さらにそれが体力の向上にもつながり数値を大きく伸ばしている。
(陸上競技場、椿の平、峠の展望台、正面展望台、長谷寺、頂上など)
- ・7月の数値低下の原因はプール遊びによるものである。
- ・9月から10月にかけて、運動会に向けた練習や秋の打吹山を活用した自然体験活動により数値が伸びている。
- ・12月の低下は発表会に向けたあそびが活動の中心となっていることや、戸外あそびが天候に影響されやすい時期であること。

※このデータはあくまでも一日4時間装着した条件のもとでの平均数値である。

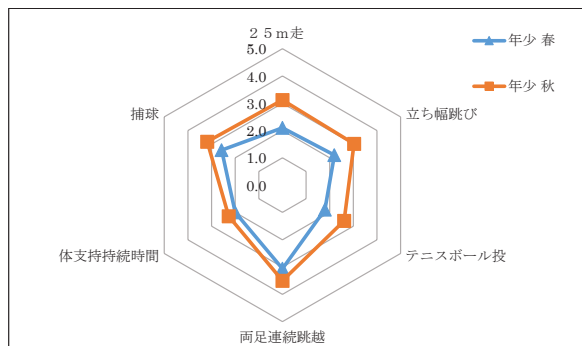
② 平成29年度と令和3年度の5歳児の万歩計平均数値比較



・令和3年度の万歩計データと新型コロナウイルス感染の流行前である平成29年度のデータを比較してみると、上図からも分かるように全体的に低下している。感染拡大を防止する対応により、あそびの幅が制限されてきたことが低下の原因として大きく占めていると推測できるが、園外活動がここ数年で変化してきているのではないかとすることも原因として考える。気温上昇により熱中症警報発令が年々頻繁になっていることやマダニの発症事例などで園外活動を控えてきたことにもあるように考える。

③ あそびから獲得していった力と思われる体力測定の結果
～年齢を追うごとにバランスよく力を獲得している～

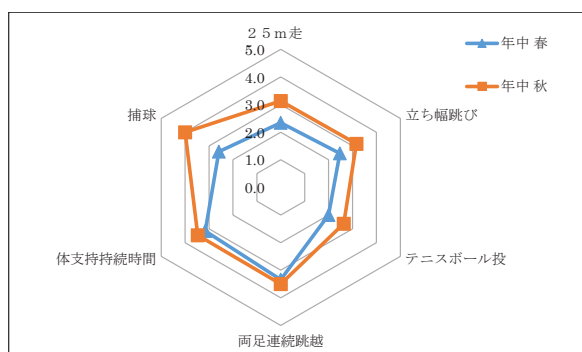
《年少》



春から秋の伸び幅を見ていく中で、変容がよく見られる学年であることがよくわかる。固定遊具や園庭というカテゴリにとらわれることなく、広い場所での活動を用いての全身運動を行うことでの伸びを表していると考えられる。



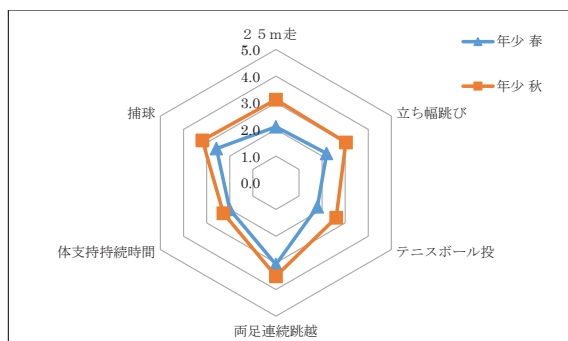
《年中》



バランスの良い力の獲得を目指して取り組んだ学年であり、「体のバランス力」を重視してあそびを進めていった。その結果がチャートにも表れているが、伸びの大きさを見ると伸び悩んだところもある。全体的なバランスの良さを今後も意識した遊びの展開に繋がられると感じる。



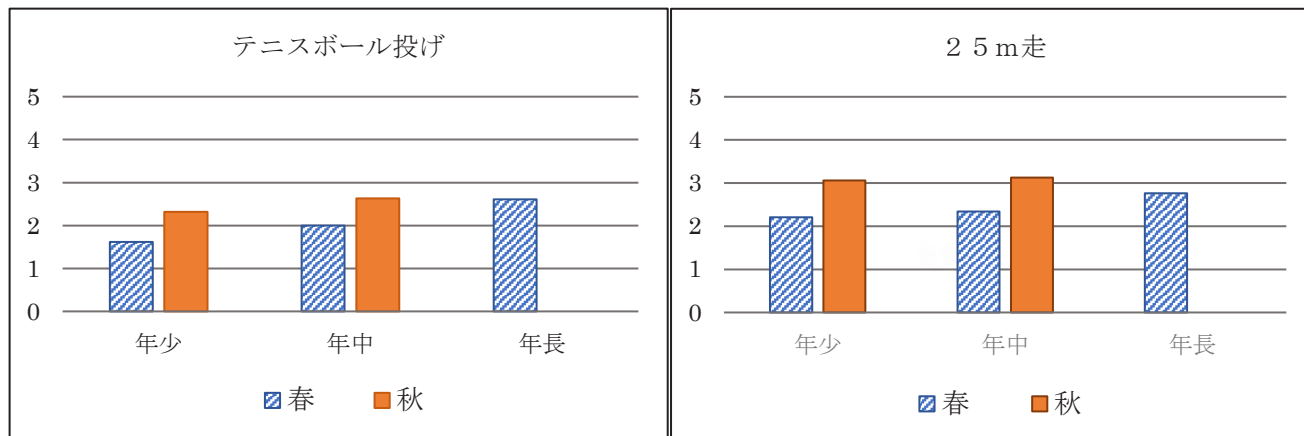
《年長》



サッカーあそびやかけっこなど全身を使ったあそびが主にあった学年である。体の機能が高まる中で、柔軟に体を動かすことを目的とし基礎体力の向上に努めていくことでバランスの良い力の伸びに繋がっていったのではないかと感じている。



《R4年度 年長児の変容》



バランスの良い力の獲得を目的として取り組んできた学年であり、意識しなければ獲得できない力である“投げる”、園庭の狭さからなかなかダイナミックに行えない“走る”という2つの力の更なる獲得に向けた取り組みを日常のあそびに加え、子どもたちが楽しみながら自分で選択し遊べる環境づくりを行っていった。その中で自然と投げるあそびに子どもたちが集まり、互いに競い合いながらあそびを展開していった。園外保育ではダイナミックに体を動かしながらあそびに没頭したりする姿がよく見られ、まだまだ発展途上であるがその成果が見られてきていると感じる。バランスのいい力の獲得に向けたあそびの展開の第1歩となっていると感じる。

④ アサヒフットグラファー足型測定からみえるもの

足型測定のデータ化から見えてくるもの・生まれたものとしては、

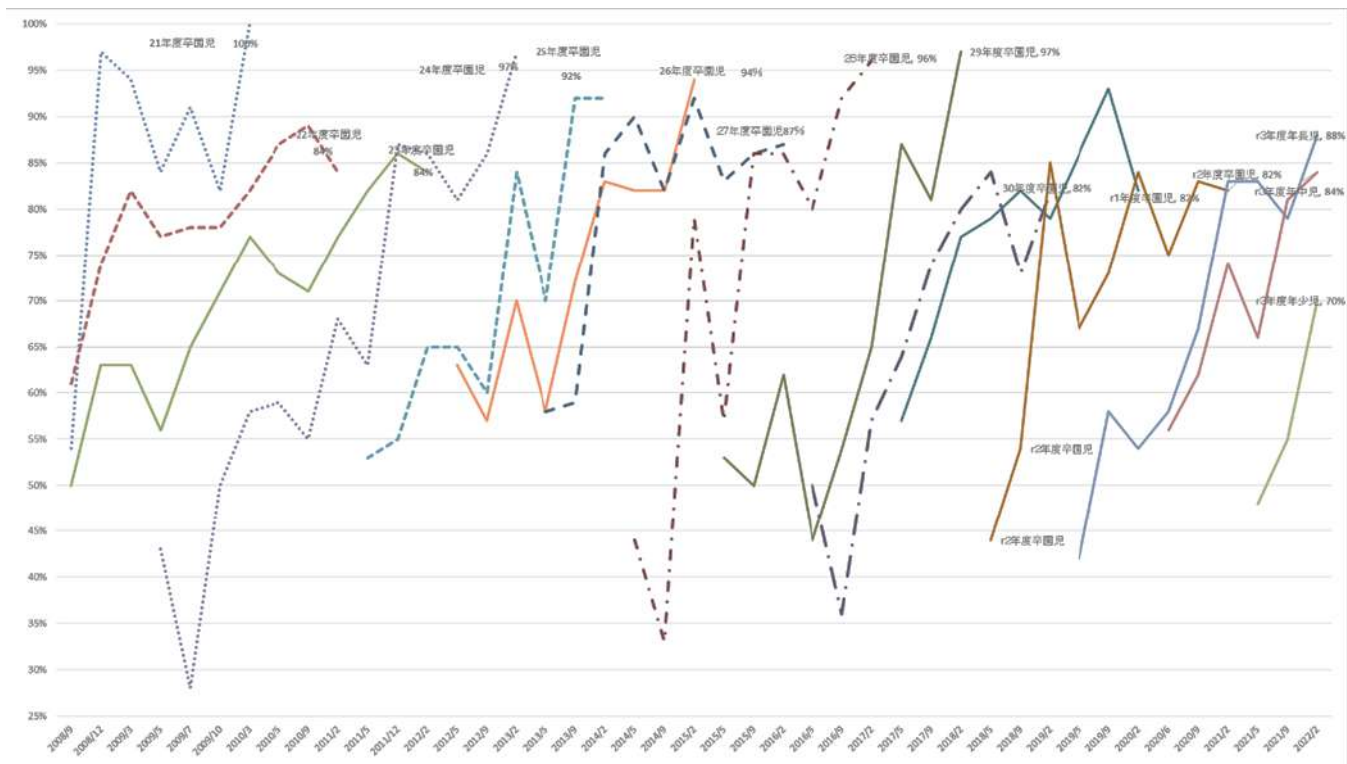
- a. 土踏まず形成率の変化 b. 季節による足長の伸び幅 c. 靴の適合率
- d. 内反小趾・外反母趾の状況 e. 足趾接地率 等がある。

各個人の“足長”“足幅”“踵幅”“足囲”“接地率”“1趾角度”“5趾角度”“足サイズ”“ウイズ”等から継続的にデータ化しているのは①②のみとし、必要に応じてデータ化しているのは③④⑤等である。



出典：アサヒシューズ

《土踏まず形成率の推移》



土踏まず形成は、「一旦、形成を確認できた場合でも戻り現象が起きること」が分かってきた。形成が認められるようになる3歳頃の40～50%台の形成率から山あり谷ありを経て、卒園時には90%以上の形成率に達するよう目指してきた。

しかし近年では平成29年の形成率97%を超える結果が出ていない現状があり、環境の変化や遊びの変容、また取り組んでいる足あそびの種類及び質を振り返る必要性を感じている。考察の一つとしては、これまで足あそびのバリエーションなどの工夫を凝らしたり、あそびとしてのアップデートを行ってきたつもりではあったが、例えば“足指を使うこと”が、足指に“挟む”遊びなのか、足指をしっかり“動かす”遊びなのかといったような足指の動きをもっと細分化していくことや、過去行ってきた足あそびと今の足あそび、またその遊び方（動かし方）を照らし合わせたりしていくなどを行っていきたいと考えている。

もうひとつデータから見えてくることは、足型測定を始めたばかりの年少児の土踏まず形成率は低いものと捉え、また測定に不慣れな子どもがいることを考えても、低年齢の子どもの形成率が全般的に低下している傾向にあることが見えてきた。

過去のデータからわかってきた土踏まずの形成過程は、“左右同時に形成されるとは限らず左右不対象に形成されていく”ことや、“季節や生活スタイルの変化で行きつ戻りつしながら進んでいくもの”ということを共通理解し、就学以降も続く土踏まず形成に向けた運動や足あそびの日常化と継続を大切にしていきたい。

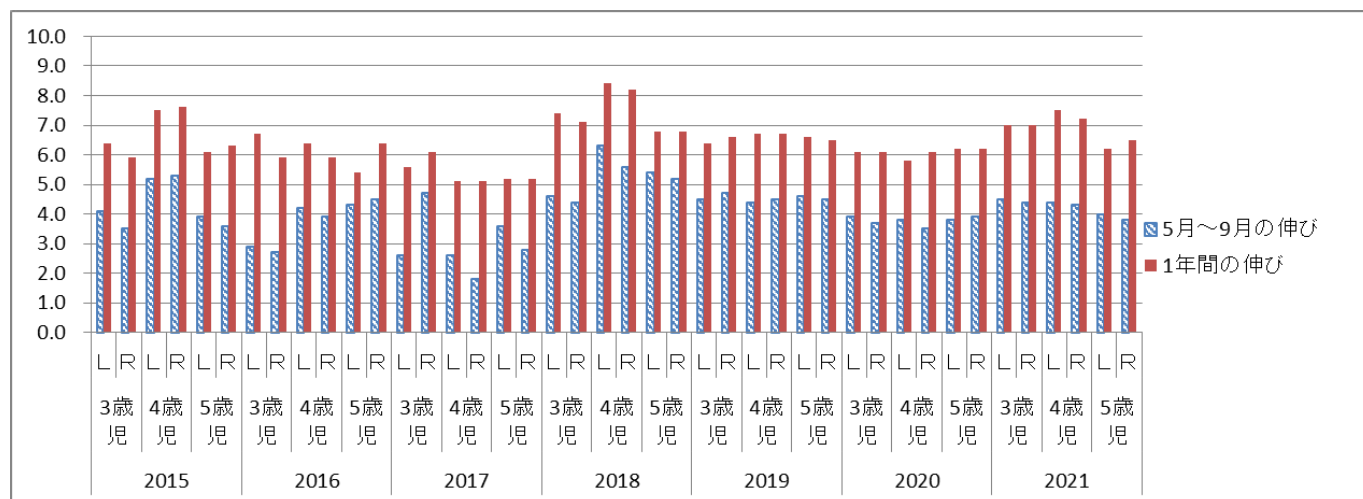
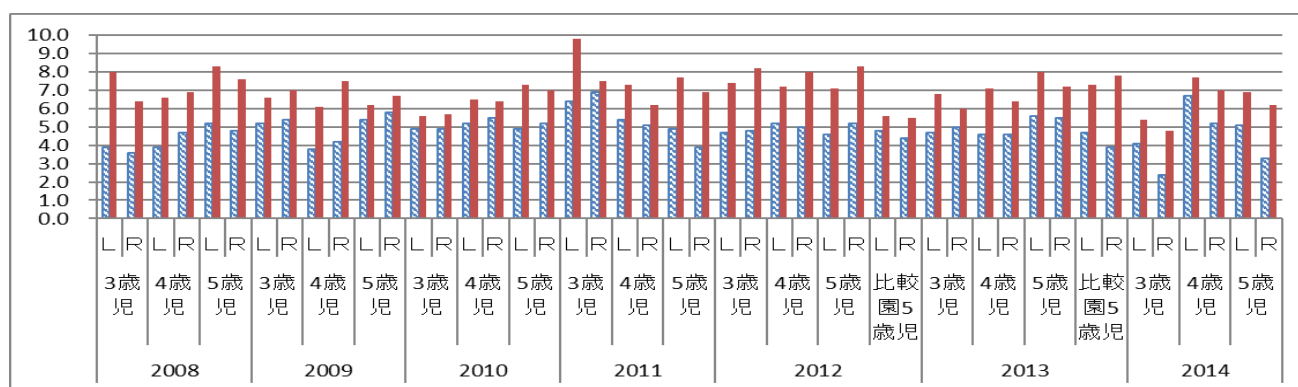
《足長》

◇足の伸びと靴との関係 ～子どもの足は、夏の間大きく成長する～

先述の足型測定で分かるデータとして“足長”“足幅”“踵幅”“足囲”“接地率”“1趾角度”“5趾角度”などがあるが、その中でも“足長”に視点を当てて、5～9月の伸びと年間の伸びについてのグラフを継続して作成している。研究を続けていく中で気付いてきた“子どもの足は、夏の間大きくなる”ということが見てとれる。

(以下、14年分の足長の変化の計測データ 2012年度、2013年度は、比較園・5歳児も入っているが、同様の傾向が確認できる。)

過去の学年・(一部比較園)の足長の年間伸寸と春秋期伸寸の比較



このことから、「秋には“靴合わせ”を」ということを、PTA総会・園だより・測定結果通知などを通して保護者啓発に心がけている。足型測定で分かる、靴の自称サイズと推奨サイズの差異の減少や連絡ノートなどを通して靴及びサンダルを選び方などをたずねてこられる姿からも、子どもの靴を選ぶ保護者の関心が広がっていることは大変喜ばしいと捉えている。

《取り組みの過程で子どもの姿に現れるトラブルと回避・改善策の例》

◇足のトラブルの傾向（令和4年2月測定データより）

年齢 トラブル別		3歳児	4歳児	5歳児
内反小趾傾向児の割合 （第5趾角度10度以上）		61%	41%	64%
外反母趾傾向児の割合 （第1趾角度10度以上）		24%	19%	12%
靴の適合率 （自称サイズと推奨サイズ との差）	○：±0	76%	56%	60%
	△：+1 cm	12%	19%	20%
	×：+1.5 cm	3%	9%	12%
	×：-1 cm	9%	16%	8%

未接地趾	第5趾未接地率	第5.4趾未接地率	第5.4.3趾未接地率
5歳児に見る浮趾の割合	71%	25%	4%

園医検診の視診・触診から「内反小趾傾向」「浮き趾」とされる児が例年多い。乳幼児期の足は軟骨で形成されているため、履いている靴が足に合っているか否かということとはとても重要なこととなる。上図のデータは、「内反小趾傾向」「外反母趾傾向」など足のトラブルの傾向や実際履いている靴の適合性の状況を示している。乳幼児期からこどもの足を守るために保護者の関心を広げていきたい。

◇足のトラブルの一例

- 内反小趾傾向（小指＝第5趾が内側によってくっついている状態）
- 外反母趾傾向（親指＝第1趾が小指側に曲がっている状態）
- 浮き趾（5本の指のうち何本かが地面に接地していない状態）
- 偏平足（土踏まずが未形成状態）
- 浮き趾（5本の指のうち何本かが地面に接地していない状態）
- 偏平足（土踏まずが未形成状態）



飛び石動画

a. b. の主な原因は「靴が足にあっているかどうか」が大きな問題と捉えている。また、c. においては、第5趾の未接地が多く、日本靴医学会などでは“子どもの浮き趾の増加傾向”が指摘されている。考えられる要因として「裸足の環境が少なくなっていること」「靴環境の多様化により、足指を使わなくなったこと」「重心が後ろに寄った暮らしのスタイルになってきていること」などが挙げられているようである。足指を使わないと浮き趾のみならず、偏平足にもなりがちで足の健全な発育を阻害する大きな原因になると言われている。また、今までの研究成果からも明らかになっており、指は直立バランスを保つための大きな役割を果たしており、その重要性は非常に高い。土踏まずの形成と同様に“全趾の接地”は大きな課題である。d. においては「真の偏平足は非常に少ない」（内田先生）と言われている。土踏まずの形成過程の中で、左右同時に形成されるとは限らず、左右不対象に形成されていくことが過去のデータよりわかってきている。また、足の形・骨が固まるのは、8歳頃（小学校3年生）とされ、足あそびの日常化や継続が望まれる。

まとめ

私たちが目指す足型には、「土踏まずがあること」「5本の指が地面についていること」「かかとの接地面がひろいこと」の3つのポイントがある。子どもたちの足を守るために靴選びや靴の履き方を子どもたちや保護者に伝えている。5月、9月、2月の足型測定後には我が子の足に関心をもって問い合わせられる保護者も多い。しかし、履いている靴のサイズが合っていなかったり、本来の足幅に見合っていない靴や、マジックテープが弱い靴、靴底が固くて歩きにくい靴を履いていたりなどの子どもの姿も見られる。合わない靴が足に及ぼす影響をしっかりと伝えられるような発信方法を工夫していきたい。

また、職員間で意見交換していく中で、園外保育の姿が変わってきているのではないかとということがあがった。中でも、倉吉幼稚園の特色の一つである異年齢交流活動に目を向けてみると、大きい児が小さい児と手をつなぎ、リードしながら打吹山のとっぺんを目指し歩いたり、長谷寺までの長い階段の道のりも歩き進んできたりしたことで、着実に子どもたちの歩く力の獲得に結び付いていたと振り返る。しかし近年、密を避けた保育活動に変わっていったことで異年齢交流活動ができない状況にある。これまで蓄積してきたデータが示していることと、目の前の子どもたちの姿から“あんなあそび”“こんなあそび”が子どもたちの足を作っているということを確認しあっていく機会としていきたい。

2 “下あご形成”の取り組み

現代の子どもに多い“土踏まず未形成”と並ぶのが“下あご未形成”という現象であることを知ったことからこの取り組みが始まった。現代病と称されるほど“下あごの狭小化”が問題視されていることを知ったところからの“下あご領域決め”であり、意識して向き合ったことのない領域であった。

そして、専門家の指導の下、以下の3ポイントを目指すことにし、“歯列撮影”と“咀嚼力判定”と“歯磨き指導”を通したアプローチを考えた。

- 1 乳歯の時期の歯と歯の間に隙間があること。(※永久歯の生え場所が確保されているということ)
- 2 かみ合わせがしっかりとしていること。(※何でもよくかみ砕くことができるということ)
- 3 むし歯がなく、きれいな歯であること。(※歯みがき・うがいが習慣化しているということ)

(1) あそび・活動

お口あそび	〈あいうべ体操〉 	お口を使ったあそびを楽しみながら咀嚼・発声・呼吸などの発達を目指している。発達段階を意識した歌やあそびを朝の会や帰りの会、日々の活動の中で取り組んでいる。「あいうべ体操」では、口を大きく開けたりすぼめたり、舌をべーっと出したりする。日々の定番のあそびとして子どもたちの大好きな時間となっている。	0 ～ 5歳
	〈スノードームおもちゃ〉 	感染症拡大防止対策をしながら、色々な手作りおもちゃを作り、あそびを楽しんでいる。スノードームおもちゃでは、雪に見立てた発砲ビーズが、吹く強弱によって変化し動く様子を自分で試しながら楽しんでいる。	3 ～ 5歳

カミカミメニュー給食	〈カミカミマーク〉 	献立には、管理栄養士さんと協議し、咀嚼回数を増やしたり咀嚼力の強化を目指し、食材の硬さや大きさなどを工夫したメニューをちりばめている。毎月家庭に配布されるメニュー表には、噛み応えのある食材にカミカミマークを表示している。楽しく噛む事を意識できるよう、年齢に合わせた内容で声掛けを行いながら、噛み切ることやモグモグすることを習慣化し「噛む力」「噛み切る力」を育てている。	0 ～ 5歳
カミカミおやつ	〈するめカミカミタイム〉 	年少～年長児は、お帰りの会に「かみかみタイム」としておやつにするめを噛む。3分間噛む事を目標に砂時計で時間を示し、一定時間しっかり噛めるように工夫している。今年度は3分間しっかり噛めるよう学年によって大きさを調節している。年度末には「よく噛み、何回も噛み続ける」ことが身につき、大きいサイズになっても噛むことができるように成長していることを期待したい。 0～2歳児は、適度な栄養摂取の為、朝おやつとして煎餅やビスケットなどしっかりと噛む必要のあるものを取り入れている。未満児、預かり保育は、咀嚼を意識した手作りおやつが給食室から提供されており、子どもたちのお楽しみの一つである。	0 ～ 5歳
給食講話		栄養士さんによる「かみかみ指導」として年に2回お話し会が行われている。しっかり噛んで食べる事で体にどんな良い事があるのか、なぜ朝食をしっかりと食べる事が大切なのか等、分かりやすくイラストを取り入れながらお話頂いている。その中でも“30回噛むこと”の大切さを聞いた子どもたちは、給食時間に友だちとの会話の中で「今、何回噛んだ？」「私は20回噛んだよ」「ご飯を30回噛むと甘くなった」などの姿が見られていた。 また朝食についてのお話では、朝ごはんをしっかり食べる事で脳が目覚め、思考力の向上が期待できる事やまた、便の出も良くなる為、健康に過ごしやすくなることも聞き、子どもたちや保護者への意識づけに繋がっていきたい。	3 ～ 5歳
歯列撮影	〈リップリトラクター使用〉 	年に2回、園歯科医の指導により小児用リップリトラクターを使用し子どもたちの歯の様子を撮影している。歯並びや歯のかみ合わせといったところに着目しつつ、歯と歯の隙間が十分に空いており、永久歯の生えてくる隙間があるかといったところに着目しながら行うことで、個別の食生活や咀嚼力判定との相関を探るためのツールとなっている。	3 ～ 5歳

咀嚼力判定	〈ロツテキシリトール 咀嚼力判定ガム〉 	下あごの発達を知る窓口のひとつとして咀嚼力に目を付け、園歯科医の助言により「咀嚼力判定ガム」を取り入れている。口に入れ2分間噛み続ける。噛み終えたガムの色を判定表を基準に5段階で咀嚼力判定する。判定はクラス担任と行い、日常生活とリンクさせることで、姿勢や、流し込み傾向やすりつぶし食べといった日常の姿が現れていることがみえてくると感じている。	3 ～ 5歳
歯科指導		6月上旬に倉吉市の歯科衛生士さんに来園していただき歯科指導を受ける。クイズを通して歯に興味、関心を持ちながら正しいブラッシングの方法を知った。また、食べたら必ず歯を磨く、好き嫌いせずなんでもよく噛んで食べる、甘いものは少しにしようの3つの約束を聞き歯磨きの大切さを学ぶのが内容となっている。 コロナ過で歯磨きの制限がある中だが、正しい知識を身につけ自身の歯を大切にする気持ちを育てていった。さらに、保護者の方の仕上げ磨きの必要性も感じた。	4 ～ 5歳
心がよるこぶ体験活動			
打吹山をいただく	〈タケノコ堀〉 	自然体験を通し、打吹山に実る自然物を収穫している。「どの時期に・どんな所に・どんな風にでき・どのようにして食べるか」生で体験することでこどもたちの知識となり感性を磨き、考える力の礎となっている。自分たちがかかわり収穫した食材は食べることへの期待や意欲と繋がっている。	
牛舎体験	〈えさやり〉 	自分の体の倍以上もある大きな牛に会いに、関金まで出かける。牛の臭いや糞、大きさにも動じず、はりきって餌やりのお手伝いをする子どもたちの姿は体験の積み重ねによるものだと感じることができる。その中で、命の大切さも学んでいく子どもたちである。	
農業体験	〈田植え〉 	平成23年春から継続している農業体験活動。年長児の泥んこ田植えをはじめ、手を真っ黒にしながらジャガイモやサツマイモを掘っていく。自然の中で夢中になって遊ぶ姿は子どもたちの自然な笑顔を引き出していくことを実感する。	

(2) 取り組みの過程で生まれてきたお口あそび

(カテゴリ) A：唇を使う B：舌を使う C：口の周りを全てを使う

あそびの名称	カテゴリー	内 容	写 真	対象年齢
喃語あそび	A B	「レロレロレロ～」「あばばば～」など舌や唇を使い、喃語の発声を楽しむ。		0 歳～
ふれあいあそび	C	マッサージなどのスキンシップや、「いっぽんばしこちょこちょ」「ラララぞうきん」などのふれあいあそびで笑い声をたくさん出す。		0 歳～
ままごとあそび	C	あそびの中でごはんを食べる真似をして“モグモグ”と口を動かしたり、“あ～ん”と口を大きく開けたりする。		0 歳～
絵本あそび	B C	くり返しの言葉あそびをしながら真似っこをして遊ぶ。「ででこい ででこい」「だるまさんが」「へんしんトンネル」等。		0 歳～
的吹きあそび	C	息を大きく吸い込んで的をめがけて吹き倒す。的の数を増やしながら挑戦していく。		3 歳～
タンポポ綿毛とばし	C	ふう～と息を吹いてたんぽぽの綿毛をとばして遊ぶ。		3 歳～
吹きゴマ	C	息をふいて紙で作った吹きゴマをまわす。		3 歳～
むくむくおばけ	C	ストローに息を吹き込んで、ナイロン袋を膨らませる。		3 歳～
ストロー笛	A C	ストローの先端の角を落とし唇で挟んで音を出す。ストローの長さや吹き方で変わる音の違いを楽しむ。		4 歳～
ピーピー豆 笹笛	A C	昔からの遊びであり、季節を楽しむお口遊び。挟んだ時の唇の強弱や伝わる振動を感じていく。		4 歳～
バブルペイント	A C	色をつけたシャボン液を吹き、紙に写る模様の変化を楽しむ。吹き具の工夫で更にお口あそびが広がっていく。		4 歳～

(3) “あそび” や “活動” の傾向をデータからみる

① 歯列撮影

＜A児・B児の歯の移り変わりの様子＞

<A 児>	年少 5 月	年少 2 月	年中 6 月	年中 2 月	年長 5 月	年長 2 月
歯列						
咀嚼力判定	5	4	5	5	5	4

<B 児>	年少 5 月	年少 2 月	年中 6 月	年中 2 月	年長 5 月	年長 2 月
歯列						
咀嚼力判定	4	5	4	5	4	4

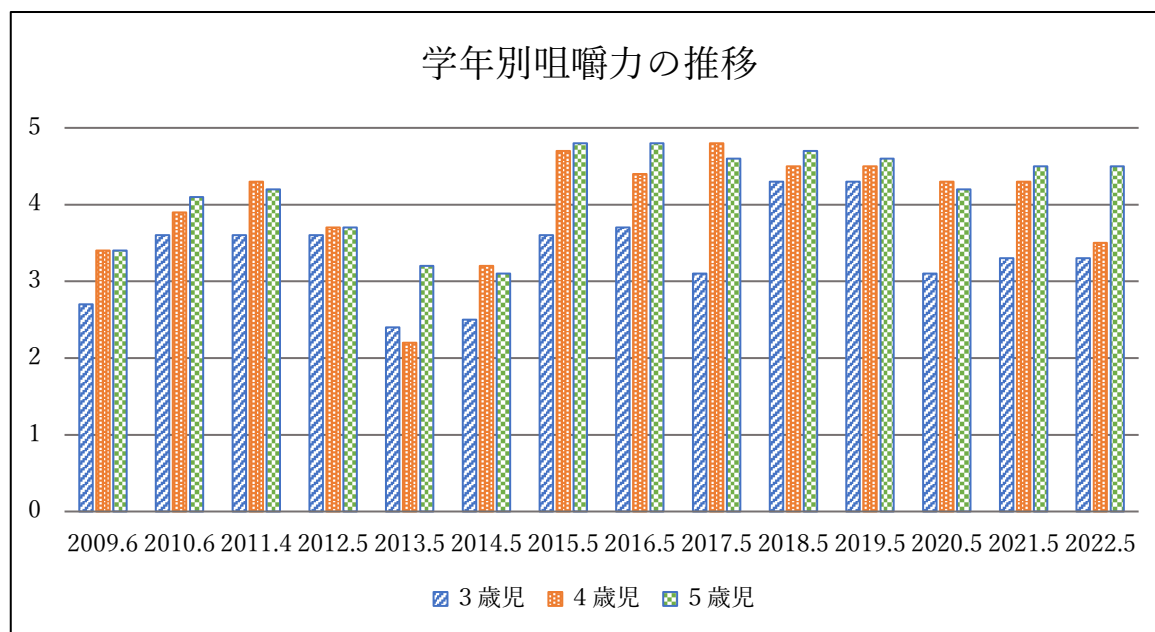
年少児からの推移であるが、A児・B児共に歯と歯の隙間が出来てきているように見受けられる。そして年長の 5 月頃には永久歯が生えはじめ隙間をしっかりと埋めてきていることも分かる。咀嚼力判定においては、年少の始めからしっかりと給食を噛むということができており、よく噛んで食べるという事の大切さを再度伝えると共に、普段の給食やおやつの「するめ」もしっかり噛むことを意識していけるように声掛けを続けていった。しかし、新型コロナウイルスの蔓延に伴い、給食時には黙食を心掛けるという指導があり、黙食を実践していった結果、判定が下がってきていることが見えてきた。この結果から、普段の給食時には友だちと楽しい雰囲気の中で「何回噛んだ？」などと会話をしながら食べるということが咀嚼の回数にもつながっていたのではないかとこの考えを持つようになった。このように子どもたちが『噛むこと』を意識していくことで「下あごの形成」に繋がっていくのと同様に『楽しい雰囲気での給食』というものも「下あごの形成」に繋がるのではないかと感じる。

② 取り組みの過程で子どもの姿に現れるトラブルと回避・改善策の例



我々には“むし歯”しか馴染みのない段階で、隣り合った歯の結合である“癒合歯”や下の歯列が前に出ている“反対咬合”や上下の交叉が見られる“交叉咬合”と出会うことになった。「噛む」という視点での困難性はどう向き合えるかということでもあると考えているが、こうした実態に対しての向き合いは「家庭」へつなぎ「歯医者さん」への橋渡しになることしかできないと考えている。また、“咀嚼”の問題は“発生・発音、ひいては言葉”につながる重要な要素であることが分かってきた。“お口あそび”や“かみかみタイムの設定”等で子どもの側に立った支援が出来ると考えて、日々の保育にしっかりと根付かしてきたつもりである。今後とも重要な役割と捉えて実践化していくつもりである。

③ 咀嚼力判定データ



上記のデータに目を向けてみると噛む力は少しずつではあるが、確実に上がっていることがわかる。これは、かみかみおやつや、お口あそびなど意識して継続してきたことで力となっているのではないかと捉えている。

また例年でいくと3歳児は咀嚼力ガムとの初めての出会いの中、「ガムを噛むとどうなっていくの?」という不思議な気持ちでの咀嚼力判定となる。4歳児になるとガムを噛むことにも慣れ、自分のペースで噛んでいくことができ子どもたちが測定の意味を知り楽しんで取り組んでいる。しかし2021年の3歳児から2022年の4歳児においては咀嚼力の伸びが少ない結果となっている。コロナ渦でマスクを外せない日々、お口あそびも難しく、マスク範囲での言葉の発声や表現といった下あご形成の大切な時期に制限のかかることが原因のひとつでもあるように考えている。



色					
	きみどり	クリーム	うすもも	ときいろ	ぼたん
評価	1	2	3	4	5

(カラーの巻末資料有り)

まとめ

下あご形成に向けた3つのポイントを、「①乳歯の時期の歯と歯の間に隙間があること。②かみ合わせがしっかりとしていること。③むし歯がなく、きれいな歯であること。」とし、歯列撮影と咀嚼力判定、歯磨き指導を通したアプローチを続けてきた。昨年度と今年度の結果から子どもたちの噛む力の伸びが小さくなっていることが見えてきた。

マスク生活が当たり前となり、言葉の獲得の時期に保育者の口の動きを見ながら真似ることの機会の減少や、歌あそびやお口あそびにも制限がかかってしまうことで口周りを動かす機会が減っていること

もその要因の一つと言えるのではないかな。

その中でも毎日の生活習慣の中で欠かせないのが給食やおやつである。感染症状況により、黙食になったことで友だちとの楽しい雰囲気での給食が難しくなり、子どもたちの中にも噛むことの意識が弱くなってきているように実感している。保育者自身も改めて意識し直しながら、給食講話や日々の給食時間の中で、噛むことの大切さを子どもたちに定期的に伝え、子どもたち自身が美味しさを噛みしめながら食べるように促している。また、保護者にも噛む力の大切さが伝わるよう発信をしていくことで、家庭でも子どもと一緒に意識が高まっていくことを期待したい。

下あご形成に向けた3つのポイントでもあるように、子どもたちの健康な歯を守り、噛む力がついてくことで、姿勢の保持やあそびの力にどう繋がっていくのかを見守り続けていく。今後も様々なあそびや活動を通して、今年度2月の咀嚼力判定結果や子どもたちの姿が変容していくのを楽しみにしたい。

3 個の育ちからみえてきた変容

(1) 抽出児について

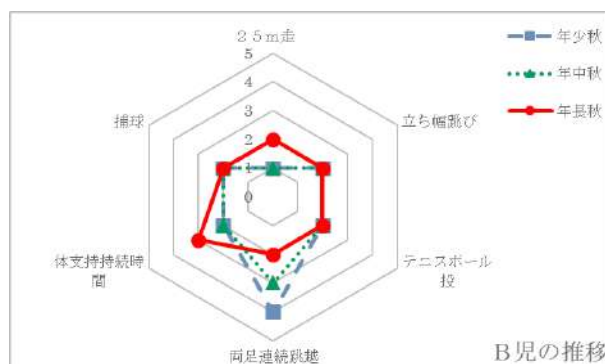
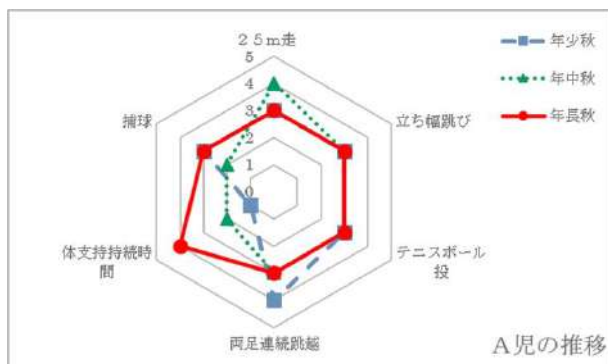
A児…年齢をおうごとに戸外遊びが増えていき、年長になると鬼ごっこなど友だちと群れて遊ぶ姿がみられてきた。また雲梯や鉄棒などを通して多様な体の動きを楽しむことが多くなっていった。給食において、偏食はほぼない。たくさん噛みながら時間をかけて食べきる。しっかりと咀嚼していることが下あごの動きで確認できていた。

B児…あまり戸外あそびに興味を示さず、室内遊びで過ごすことが多かった。斜面や段差のあるところでは、手をついて少しずつ進む姿があったが、様々なあそびを経験する中で外遊びへの興味を膨らませていった。給食において、偏食はほぼなくなんでも食べることができるが、隣や後ろを向きしゃべりながら食べる姿もあり、よく噛んで食べることがおろそかになってしまう。

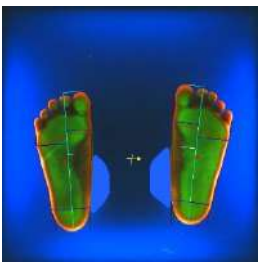
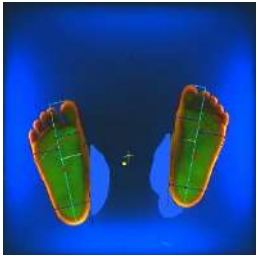
(2) 万歩計月別平均値の比較

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A児	4,887	4,349	3,091	2,489	3,441	5,181	5,116	3,647	3,574	3,205	4,599
B児	5,984	5,795	4,765	3,617	4,670	5,827	5,525	3,817	4,641	3,733	5,864
平均	5,769	4,998	3,614	2,721	3,894	5,375	5,085	3,583	4,156	3,646	4,858

(3) 体力測定の推移 (3歳児～5歳児)



(4) 土踏まずの変容 (3歳児～5歳児)

A 児	年少 2月	年中 6月	年長 2月
足 型			
B 児	年少 9月	年中 2月	年長 2月
足 型			

万歩計数値には大きな差はないものの、土踏まず形成の変容と体力測定の推移から、運動量や運動能力の獲得に個の特徴がみられていた。A児の足型測定の推移では、土踏まずができたり戻ったりしながら形成されていくことがみてとれる。B児においては、少しずつ土踏まずの形成が進んでいる様子がわかる。これは、本児の遊びの幅が広がり運動量が上がっていったことの表れであると考ええる。また、3年間の体力測定の推移をみると、種目によってばらつきのある形状が、年長児の測定結果では正六角形に近づいてきていることから、バランスの良い力の獲得がすすんできているといえる。日々の運動あそびや足あそびを継続することの必要性を再確認することができた。

(5) 歯列の推移と咀嚼力判定 (3歳児～5歳児)

A 児	3歳児 2月	4歳児 2月	5歳児 2月
歯 列			
咀嚼力判定	5	5	4
B 児	3歳児 2月	4歳児 2月	5歳児 2月
歯 列			
咀嚼力判定	3	5	4

(6) 歯科検診

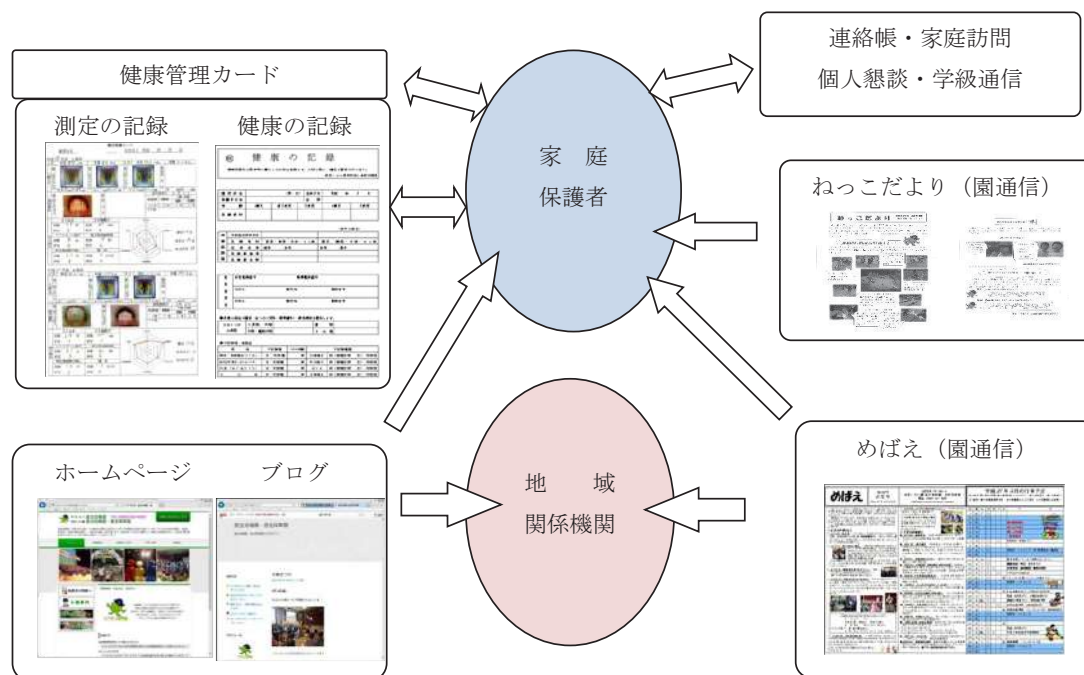
歯科検診結果(2021.06.06実施 5歳児)				
	要注意乳歯	要観察歯	う歯(むし歯)	
			処置歯	未処置歯
A児	0	0	0	0
B児	0	0	0	2

歯列の推移では、A児は永久歯が生えてくる隙間がしっかりと空いており、5歳児2月の測定では前後することなく永久歯が生え替わってきている様子わかる。むし歯のないきれいな歯である。咀嚼力判定結果をみても日頃から噛む食生活が定着していると思われる。B児は前歯にむし歯による隙間が確認できる。3歳児2月と5歳児2月の歯列を比較すると、乳歯の間に永久歯が生える場所である隙間ができてきたことがわかる。これは、毎日するめを噛んできたことや給食や家庭での食事において噛んで食べることを意識してきたことの成果ともいえるのではないだろうか。永久歯への生え替わりはまだであったため、その後の歯列は未確認である。

土踏まず形成の取り組みと下あご形成の取り組みは、子どもたちの健やかな身体づくりとなり、子どもたちの豊かな心と言葉育ちにつながる道の上にあると捉えながらの日々である。

4 家庭・地域との連携を目指した取り組み

(1) 家庭・地域との連携を目指した取り組みの実践



様々な形で家庭や地域、関係諸機関との連携を行ってきた。その際に大切にしていることとして「分かりやすく、正しく情報を伝えていくこと」「返信をしやすい工夫をし、それらに対してしっかりと対応していくこと」「具体的な子どもの姿や教育的な視点を盛り込むこと」の3点を心がけ情報共有の上での発信に心がけたいと考えてきた。

その中でも課題となっていた「測定の記録」について年3回行う足形測定、年2回の歯列撮影、体力測定の結果の配布時期を9月の測定後とし、運動会に“足に合う靴”を準備してもらうこととした。又、例年同様学年末の3月にも配布し、担任からのコメントと保護者からの感想を記入し合うことで子ども一

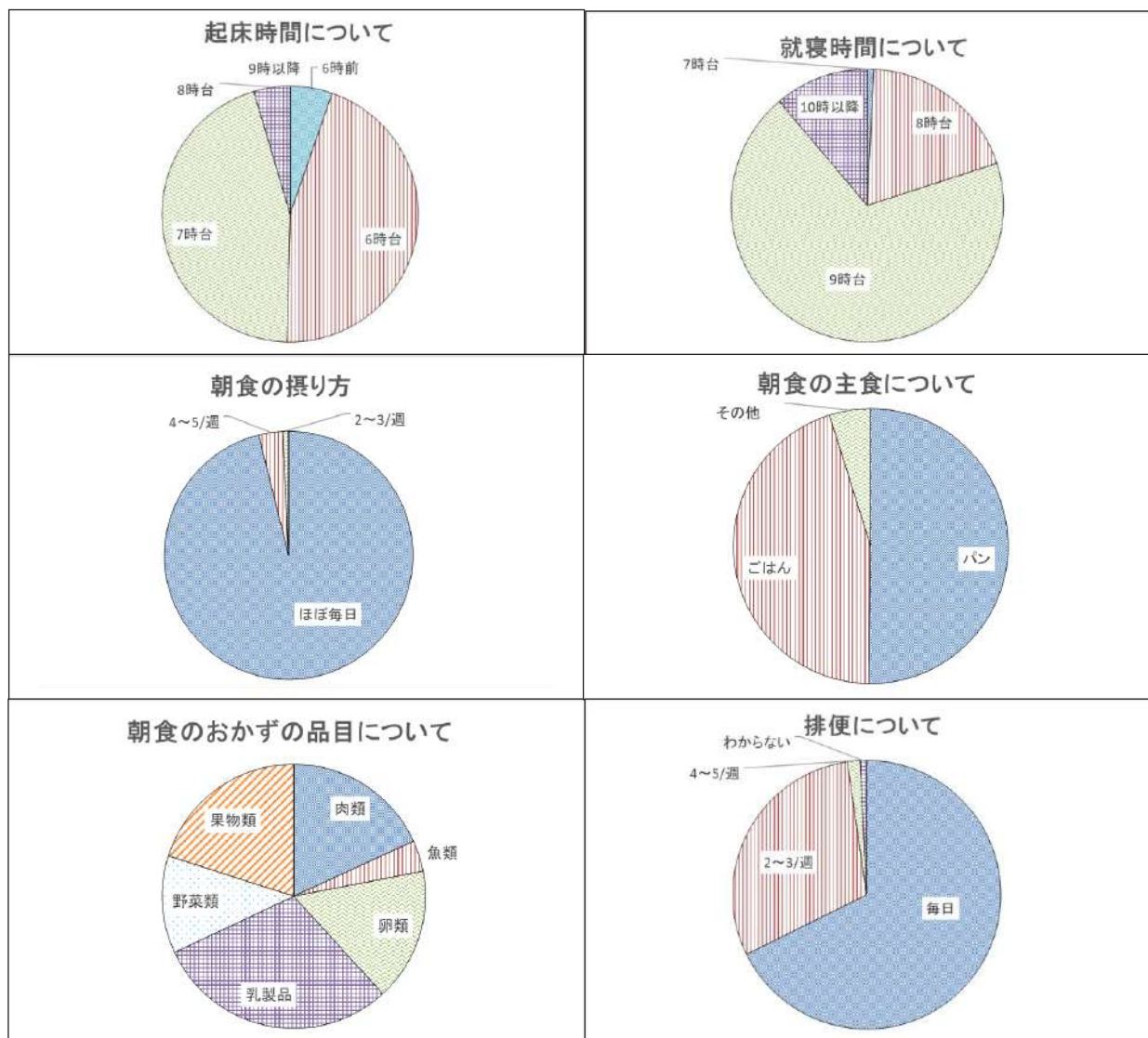
人一人の土踏まずと下あご形成への意識の向上へと繋げている。令和元年度を境に以降 2 年間は自主公開を中止としてきた。この取り組みの啓発を継続していくために、学期毎に全学年共通の「ねっこだより」を各家庭に配布し、日々の足あそび・お口あそび・カミカミメニューの活動内容を分かりやすく情報提供してきている。子どもの姿は、保護者・地域・園の丁寧な連携により変容していく。今後もこの取り組みを前進していきたい。

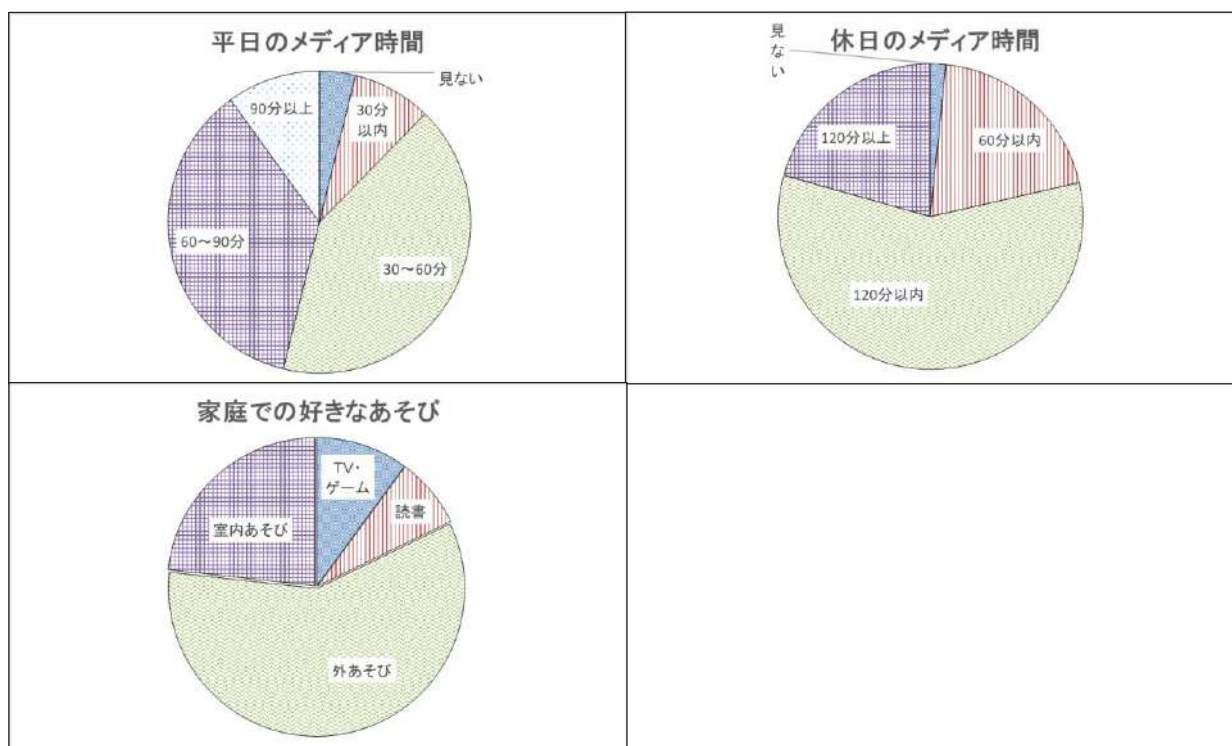
(2) 生活実態調査

① 調査項目

- 問 1 起床時間について・就寝時間について 問 2 朝食の摂り方について
 問 3 朝食の主食の品目について・朝食のおかずの品目について
 問 4 排便の頻度について 問 5 平日と休日のメディア視聴（TVとゲーム）
 問 6 家庭での好きなあそび

② 調査結果（令和 3 年 11 月実施）





園での生活リズムに慣れ、心身共に安定していると考える 11 月に行っている生活実態調査では、ほぼ安定した結果がみられる。しかし気になるデータとしては、朝食の偏りや 1 週間の排便回数があげられる。朝食においては主食、乳製品はよく摂取しているが、野菜や魚の摂取量の少なさが表れている。もう一つは排便回数が週に 2～3 回といった現状も驚きである。中には登園後に排便をする子もある。朝食後すぐの登園、登園途中の車中での朝食といったことが原因であるとも考えられる。給食だよりやねっこだよりにおいて朝食の大切さなど啓発掲載してはいるがデータへの変化が少ない。今後、アンケートデータ公開とともに、園での子どもたちの姿もより多く伝えていける工夫を探っているところである。

また、子どもが好きなあそびでは「外あそび」が半数以上を占めていることに安堵できるが、年々メディア視聴などの言葉のやり取りが少ないあそびも好まれる傾向にあるという実態はとても気になる。園生活では言葉のやりとりを楽しむようなお口あそびを取り入れたり、保育者や友だちと関わるのが楽しいと感じられる手あそび、歌あそび、絵本の読み聞かせなど、繰り返すことばの楽しさ、ことばの獲得に向けたあそびを今後も取り入れていくことで“人の中での居心地の良さ”や“人と関わることの喜び”を実感できる機会を増やしていく保育をしていきたい。

(3) 後追い測定と靴履き指導

① 継続実施から見えてきたもの

「後追い測定」と称した「卒園同窓会」の立ち上げとなったのが、2012 年（H24 年）である。毎年 9 月の第 1 か第 2 日曜日に開催し、卒園生とその保護者の訪問に合わせて“足型測定”と“靴履き指導”を実施してきている。年長時のデータから重ねていくことで、成長の喜びとともに“足のトラブルの発見”

“靴の適合の助言”あたりが出来ることで、阿部薫先生の“何にもならん！”への答えを出す機会を得ているように感じてきた。“靴履き指導”は、ずっと吉村眞由美先生にお願いするとともに保護者への啓発を込めて講演会を実施し、測定結果の足型シートを渡すと共に特に気づいたことを伝えてきた。この継続の取り組みも、令和 2 年度・3 年度は実施できていないが、4 年度は 9 月に開催予定の運びとなっている。

② 足と靴のお話～靴履き指導も含めて～

《平成 21 年度》 ◇阿部薫先生足の健康チェック会

《平成 22 年度～平成 30 年度》 ◇吉村眞由美先生靴履き指導

・全園児を対象に園児が自分の靴をホールに持ち込んでの靴の履き方指導

・・・令和 4 年 9 月 12 日（月）開催予定

・卒園生の後追い測定と靴履き指導 ・・・令和 4 年度 9 月 11 日（日）開催予定



ずっと続けていくことで「骨の固まる 8 才位」「一生続く靴履き上手の姿勢」「足に合った靴を購入していく保護者の姿勢」に対して寄与し続けられると考えている。

靴の履き方



テープをはがして



くつをはく



かかとをとんとん



よせる

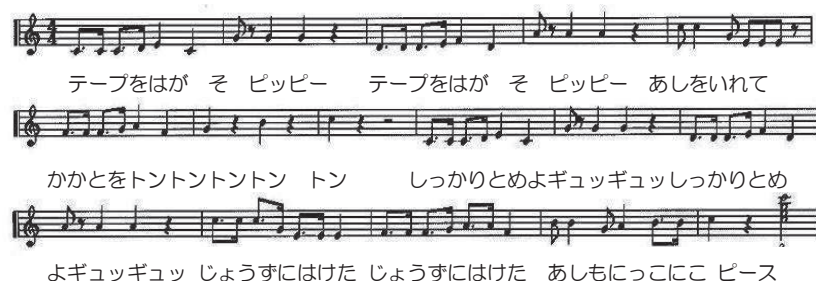


テープをギュ

くつつつソング

じょうずにはけた

作詞・作曲 落合 和美 編曲 岡部 江美



くつつつソング動画

(4) 小学校へのアプローチ

出前授業＜靴の学習（靴の役割と履き方の大切さを学ぶ）反復横とびによる検証体験＞

授業者 吉村眞由美先生（早稲田大学） 協力者 倉吉幼稚園職員 3～4 名

《平成 27 年度》 成徳小学校

《平成 28 年度》 成徳小学校・明倫小学校・関金小学校

《平成 29 年度》 明倫小学校・関金小学校

《平成 30 年度》 明倫小学校・関金小学校・西郷小学校

《令和元年度》 成徳小学校・関金小学校・西郷小学校

《令和 2 年度～令和 3 年度》 中止

《令和 4 年度》 成徳小学校

9 月 13 日（火）開催予定

資料

1 園が目指す“子の育ち”に盛ってきた《視点》について

～継続こそ変容の芽生えから成長の証の唯一の手立て～

(令和3年度「研究の足あと」より再掲)

◎園経営の維持・発展のためには・・・

他園との「横並びではない世界の設定」が不可欠であり、職員はもとより外部の方々にも理解していただける形の「園構想図」と作って活用してきました。その中には、誰にでも分かる「丈夫な身体」と「賢い頭」と「豊かな心」という目に見える形の保育・教育の展開を考え、子どもたちに必要な窓口として3点を設定し、“見える化”したのです。

(1)「丈夫な身体」については“土踏まず形成”と“下あご形成”の取り組みを通した変容を見ていく取り組みです。

(2)「賢い頭」については、30年来続いていた“SI遊び”の一層の充実で、知育の伸びを見ていく取り組みを柱にしました。

(3)「豊かな心」については、子どもたちを取り巻く大人すべてのかかわりを重視し、その大切な窓口に“本物との出会い事業”の充実をおきました。

そして、3年ごとに刷新する＜ようちえんがだいすき＞と研究発表会に向けての＜研究集録＞に見直しと実践の積み重ねをしながら今に至っています。

昨年度より、(1)の毎年繰り返されていくデータ収集から検証へむけての捉え方についての様々な解釈や理解についての考え方のベースになるものを少しずつでも明示することで、歩き方がスムーズになればと考えました。＜視点1～8＞を上げてみました。

＜視点1＞子どものデータ（歩数・足形・歯列・体力・遊び方等）を継続してとることの意味と活かし方について

＜視点2＞子どものデータを家庭と共有することについて

＜視点3＞データの姿の検証を基にした“子どもの遊びの傾向の捉え”や“遊びを創造していく力の発掘・声かけ”等について

＜視点4＞データを他園や公開データと比較することの意味や活用の在り方について

＜視点5＞データの姿から創り出していく“場の設定”力を指導力向上の視点の一つとしていく意味について

＜視点6＞専門家に学ぶ姿勢を園構想に取り入れ、実践を重ねていく職員集団としての向上について

＜視点7＞外部発信を積極的に行い、外からの貴重な声を“振り返り”と“前進”への推進に変換していくことについて

＜視点8＞折に触れ、“仮説”に戻る取り組みである「取り組みの神髄」を持ち続けるということについて

1, はじめに

この取り組みを始めて、最初の3年間で分かってきたことがいくつかありました。そして、そのことはずっと私たちの意識の根幹に座していて、いつも子どもたちの姿と対峙しています。あらためて羅列して始めます・・・。

- ★子どもの足は、春から夏を経る間に大きく成長すること。
- ★足のトラブルには、靴が大きな影響を及ぼすものであること。
- ★足指の5本の着地が少ないこと。しかし、重要であること。
- ★子どもの足の形成は8歳くらいまでかかり、一生の礎となるものであること。
- ★乳歯の間に下あごの形成をしていくことが、永久歯の場所とりになること。
- ★噛むという行為は、脳への伝達の半分以上を占めている重要なものであること。

そして、私たちはこれらのことを取り組みのバックボーンに少しずつ取り組んできたように振り返っています。まだまだ根気強く取り組んでいくことなのですが、コロナ禍の中、振り返りの時間という意味も込めて、“原点に戻ってみる”の価値を共有できればと考えました。

2, 視点ごとの見方・考え方について

＜視点1＞子どものデータ（歩数・足形・歯列・咀嚼力・体力・遊び方等）を継続してとることの意味と活かし方について

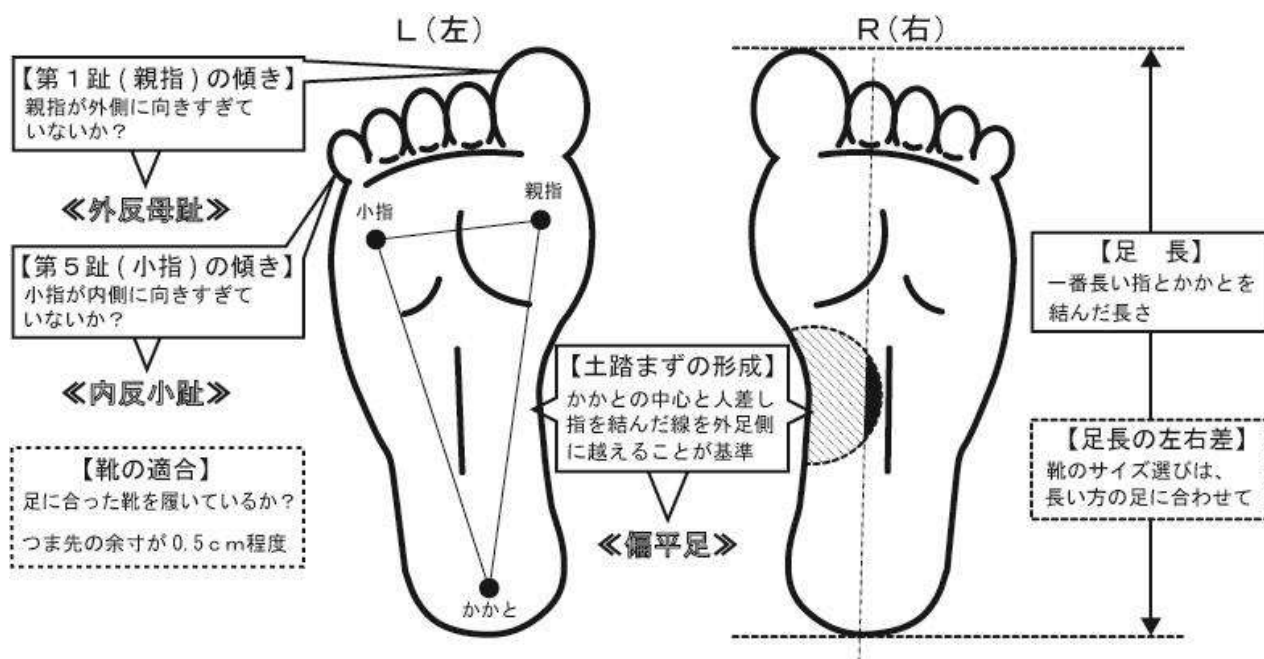
《ポイント》このことが継続して実施できるようになった背景にはいくつかの要因があるのですが、「足型測定器：アサヒフットグラファー」の存在が一番大きいと考えてきました。その契機となったのが「文科省指定事業」の事業費での購入です。感謝しながら精一杯の関係者つながりを模索しつつ今日に至っていると言えます。

取り組みを継続・深化していくということは、確かなリーダーシップのもとに職員の気持ちが一つになるということだと思ってきました。目の前の子どもの姿・変容を確かにとらえていくのは・・・あなたをおいてないのです。その職員の責任ある眼差しの集結あつてのリーダーの確かな提案が可能であるのです。

＜データの活用の視点や方法としてきたこと＞

① 足型測定器によるデータ（年3回の計測データ）

- ・足型写真は・・・「一目で形状がわかる」
- ・トラブル箇所の指摘は・・・「受け止められやすい」「改善に向けての気持ちの発揚になりやすい。」
⇒保護者へのお知らせの完了
- ・同年齢の子どもたちの中での「立ち位置」「靴の確認」の比較等、集計による結果を基にした情報提供ができるとともに、積年データ比較による考察により、研究の深まりや方向性の樹立をしていくことが可能。



<足型の例>



- 黒が地面との接地部分です。注目していくのは<土踏まずの形状・かかと部分・5趾の接地具合>です。
- 特に<1趾：外反母趾傾向、5趾：内反小趾傾向>の確認ができます。

* 参照：H2 研究の足あと・添付資料シートの見方

* これらと実際のデータの照らし合わせをしながら、トラブル回避への助言へとつなげていけると考えてきました。

* 実際には、優れたものの「足型測定シート」がありますから、随分助かっていますが、読み込みの共通理解が必須です。

* 今回導入していったものです。(お知らせシートに初導入)

細身サイズ：B/C/D 標準サイズ：E/2E 幅広サイズ：3E→→

(*アサヒフットグラファーで測定した場合のサイズ分けですから、本園データ特有のものであるともいえます。)

つまり、足の大きさだけで靴の購入を決めるのは早計なので「靴屋さんという専門家」に委ねていくわけです。しかし、資料作成までは園の責任ですので・・・応えられる知識が要るのだと思うのです。

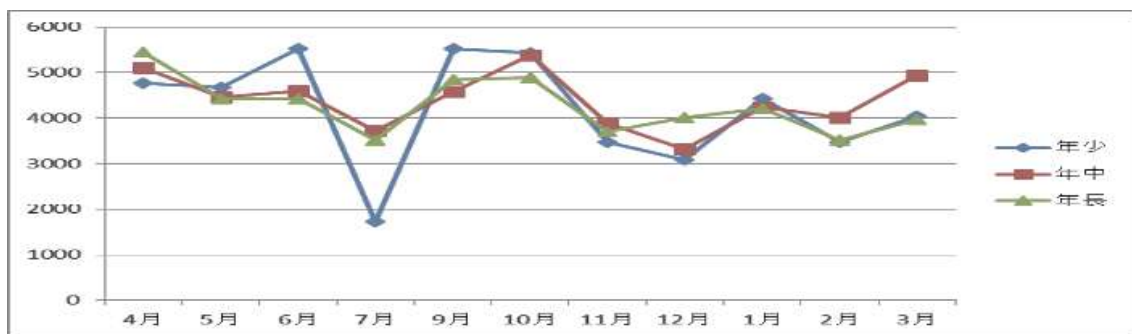
後追い測定の実施からみえることとして「靴が合っていない」「足のトラブルが発生している」ということが多発するという現象です。点検がないのでどうしてもそういうことになるのだと思われます。ですから、せめて“足の骨が固まる10才頃までの後追いの実施”を必要なことだと考えてきた訳です。

② 万歩計携行によるデータ（登園日に1日4時間程度の歩数データ）

《ポイント》取り組みのスタートに当たって持った“万歩計による歩数計測”については、「土踏まず形成を進めていくには、歩くことの確保が必須である。」という点でした。“歩け！歩け！”に意味を持たせるには測定が欠かせないと考えたのです。しかし、1日4時間の計測では子どもの暮らしを類推することは難しく、土踏まず形成との因果関係を突き詰めることなど難しいことであるという壁に当たりました。只取り組みの意味は測定の積年実施で見えてくるものもあるに違いないし、子どもたちの活動意欲を奮起させていることは確かであることから続けてきた訳です。積年データは色んな使い方でも生かして続けていけると考えてきました。（短時間測定でも個々の傾向・特性がみえるといえるものではありますよね。そのことと土踏まず形成との合致に至ることも勿論あると考えてきました。）

目的や見方を広げてみることで、「子どもの姿や遊びのレパートリー」を広げることにつながったと感じています。また、積み上げられたデータをどう料理するかでこの取り組みの意義も大きくなるのだと感じています。

そのことは、皆さんが測定値の傾向に気づき、興味深く分析・協議することでマップの可能性が広まってくるのだと思います。



・日々の歩数やクラス全体の測定値の確認により、園生活での運動量の多少を把握することを通して、保育の振り返りや園児一人ひとりを見つめるいい機会となります。つまり「個へのかかわり方の基礎データ」としての位置づけでもあると考えたい取り組みへと膨らみを持たせても来たとと言えます。

⇒「その子らしさを理解すること」と「伸びていく可能性の背中押し」の暮らしの保障が隠れている“万歩計携行”だと捉えてきました。

*色んな物語が生まれてくると嬉しいことですね。そんな保育・教育が願いです。

*そして今、最も痛感していることは「機器の日進月歩とどう向き合うか？」という点です。当初はオムロン社長さんへの直アプローチで信頼度の高いものを格安で準備できました。安心のスタートでした。しかし、日進月歩の言葉通り「進化していくもの」との対峙という課題を突き付けられている今です。

多分、新万歩計への橋渡し期間にある今、精度の異なるものをぶら下げているという現実があります。せめて同種のそれでの比較検討にしていかなければならないのではというジレンマと混迷の中にいるわけです。基本に立ち返ってデータも含め「万歩計に載せていくもの」の協議がいる段階と言えます。

③ 歯科検診時における歯列・トラブル等の口内状況のデータ

《ポイント》歯科医でもない我々にとっての限界は、目には見えない部分を類推できるほどの能力も資格もないという点だと捉えてきました。ただ、研究が継続・深化していくことで“土踏まずと下あごは影響し合っている”ということに繋がってくるだろうという予想をしてきました。そして、ある意味・・・「検証」の階段を小刻みに上っている感じで向き合えるようになってきたように感じています。

これらのデータを検証したり、遊びや動きの広がり願っての取り組みの具体的な姿を＜願い・具体的な取り組み等＞記録化していくことが重要である。このことは研究としての価値も大きい。そしてそれは、園の独りよがりとも言えますが・・・。

研究の取っ掛かりや継続の本当の値打ちは・・・子ども一人ひとりの身心（原田先生特有の表記の意味を考える・・・）の健全な発達を願ったもの意外の意味はありません。つまり、「階段を上るように成長をしていく一人ひとりの応援団の団員」としての自覚を持つ園でありたいということです。

	年少5月	年少2月	年中5月	年中2月	年長5月
歯列					
咀嚼力判定	4	4	5	5	5

1, 乳歯の時期の歯と歯の間に隙間がある。（永久歯の生え場所の確保。）

2, かみ合わせがしっかりしている。（何でもかみ碎ける。）

3, 虫歯がなく、きれいな歯。（歯磨き・うがいが身についている。）

4, 歯のトラブルの発見。（虫歯、癒合歯、反対咬合、交叉咬合等）

◎歯列状況から「顎の狭小化」の発見が可能である。

（チョンとした顎・並びきれない歯の飛び出し・本数異常等）

◎「咀嚼力」に目を付けたことで「給食」と連携できた意味は大きい。

こういった“小さな小さな一つひとつ”と“一人ひとり”をどう結び付けていくかということが究極の目的である訳で・・・子どもたちの変容を楽しむ取り組みです。

<視点2>子どものデータを家庭と共有することについて

《ポイント》「子どもの姿」あつての保育・幼児教育です。その姿に付加価値をつけていくための一つの経営の在り方として持っているのが「他園にはない取り組みの一つ一つ」だと捉え合ひましょう。伝え方の工夫をするという視点で職員間の意見交換・意思疎通等と共に家庭に向けた発信で、「子どもが検証軸」の共感が実感できるのだと思ってきました。

<視点1>の①～③の具現化を検診後にできるだけ早く家庭へ届けることで問題意識の共有や課題克服へ動く環境を整えていくことが大切だと思います。

◎家庭から“どんな返事や相談”が返ってきますか。それに対して“どんな返し方をしているか”が最も重要だと思います。研究を進める上でも子どもを変えていく上でも共に育てようとの互いの姿勢（成長・変容等への喜びや気づき）が一番大切です。

① 靴の見直し・歯医者さん受診等の動きの見えるお知らせの役目が果たせたか。

② 暮らしぶりの変化も見えるかも・・・？

(家庭からのお便りについてはコピー等で残しておくことで振り返りができ、変容の確かな裏付けとなることが多いものですし、信頼関係を築いていく上でも大きな情報源になるものです。敏感でいましょう。)

<視点3>データの姿の検証を基にした“子どもの遊びの傾向の捉え”や“遊びを創造していく力の発掘・声かけ”等について

《ポイント》データ収集・集計の考察だけにとどまらないことこそが大切です。
「投げる・走る力の弱さと遊びの傾向」「外遊びと室内遊びの比較」・・・というように、ポイントを絞った注視方法で子どもたちを見つめてみることで保育の展開に変容がみられるかもしれません。

園の置かれている環境を考えると「打吹山」や「赤瓦周辺」「競技場」「賀茂神社」「長谷寺」といったところへ出かけていくことが盛んになされてきたと考えるのですが、「〇〇へ〇〇をしに行こう」に始まる外遊びにも多様な要素で遊びを分析できると思われますし、単純に「みんなの好きな場所10」だったり、「頂上めざして〇〇歩！」といった遊びへの変換項目を提示することで子どもたちの意識をとらえたりすることも可能です。無論、新しい遊びも生まれてくることでしょう。多様な選択肢を作り出し、傾向をとらえていく一助にしたいものです。最も欲しいのは・・・子どもから発される「おさるさんに会いに行こう！」「打吹山の頂上まで行きたいな！」「競技場でおにごっこしよう！」「鯉を見に行こう！」「賀茂神社・長谷寺へお参りしよう！」といったマップ拡げかなあ・・・と思ったりします。

*“ようちえんがだいすき”に戻りましょう⇒春夏秋冬をくぐる「あそび学び」の風景

<視点4>園児のデータを他園や公開データと比較することの意味づけや活用の在り方について

《ポイント》子どもたちの遊びや暮らしは園と家庭という狭い範囲の中です。しかし、そのことをすべてとしない取り組みにするためには、近隣の園や年齢層の似通った全国の園の公開データ・情報とリンクさせてみることも大切なことだと考えてきました。

但し、近隣の園とのそれはなかなか困難を極めることです。興味・関心が本園の取り組みと似通った園に限られることかと思えます。勢い、似通った取り組みをされている県を越えた園との比較になってきます。いずれにせよ、同年齢比較でいけばいいのだと考えてきました。比較という意味を追求していくと、先ず「何のために・何を」という目的意識の明確化が絶対条件となりますが、我々は「研究のためのそれではなく、子どもの心地よい成長を目指した取り組み発掘のためのそれ」という姿勢ですから、年齢相応ならばどんなデータでも指標にはなると考えます。

一つの例を挙げてみます。

◎平成23年のこと、H幼稚園で測定をさせていただきました。比較することの意味ではなく、「日々の積み重ねのちがいがからくる測定結果といえるデータ」に力をいただいたことがありました。“足長がマイナスになっている率の差”に大きな違いがあったのです。そのことに驚くとともに、よく考えると納得だったこと・・・今も新鮮な気持ちで比較測定させていただいたことを感謝しています。

4) 他園との比較(5歳・23年度〈2011〉より)

(単位:mm)

		本園(29名)		比較園(33名)	
足長伸び値	L	7.7		7.3	
	R	6.9		8.1	
	最大値	L=8.7 R=10.2		L=32.0 R=33.9	
足幅伸び値	L	1.7		2.5	
	R	1.8		2.3	
	最大値	L=4.2 R=4.9		L=13.2 R=14.4	
足長減少値	L	5.0 (1名)		17.1,15.6,13.0,8.6,4.8,4.7,3.5,2.7(9名)	
	R	6.0 0.3 (2名)		17.5,15.6,12.1,9.2,7.86,1.1,6.1,1.0,4(9名)	
土踏まず形成率	5月	80%		96%	
	2月	84%		97%	

* 足長減少値

* 土踏まず形成率

の関係性に視点をあてましょう！

* 言えることは、“足長が減少する”ということは、“土踏まず形成が進む”ということになるということではなかろうかということでした。

* 比較園の子どもたちの園での遊びや帰宅後の暮らしの様子について、非常に興味と関心の持てる結果だったことを思い起こしています。(よく動いているんだろうなあ!!)

<視点5> データの姿から創り出していく“場の設定力”を指導力向上の視点の一つとしていく意味について

《ポイント》日常保育の中での動きと運動能力テストとの動きについて目を凝らして見て・・・「共通な動き」と「目新しい動き」に着目することから“遊びを作り出していくリーダーシップをとる保育者になる”ことで“場の設定力”に磨きがかかるのではないかと思います。その意図にそった遊びの展開から得るものは大きいとも思います。(遊びを創り・支え・広げ・共に遊べることこそが大切なのだと思います。)

遊び＝遊びは、身体的な機能の発達にとどまらず、社会性や感情・情緒の発達を促すという面からとても大切な活動です。体育遊び等意図的な設定は別として、環境をフルに生かした“自由な運動遊び”の構築を積極的に子ども世界に導入したいものです。そしてそれらは園内にとどまるものであってはならないと思います。

<視点6> 専門家に学ぶ姿勢を園構想に取り入れ、実践を重ねていく職員集団としての向上について

《ポイント》研究や実践が園内にとどまるものであってはなりません。発表会実施や集録の刊行をはじめ研修会参加等積極的な学びこそが取り組みを支えています。出かけていくこと・お招きすることの両方で身につけていくことを積み上げていきたいものです。

昔々の学びです。しかし、今に繋がり・むしろ傷口を広げているのでは・・・。

＝子どもの心身が抱えている危機の本質＝

抜粋：村山友宏元ウオーキング協会会長

「よい子は川で遊ばない」の立て看板を河川に立て、子どもたちを川から閉め出し、大人たちの都合による「子どもの囲い込み」が始まったのは昭和 40 年代であった。さらに道からも原っぱからも子どもを追い立てて外遊びの場を奪い取り、“ガキ大将”の姿が消えた。同時に、子どもを学習塾に送り込み、昭和 50 年代から TV ゲーム登場を機に、子どもたちを個室に追い込み、団欒なき核家族化の中で「子どものカプセル飼育」時代が始まった。こうして子どもたちが羽を伸ばして外を歩き駆け回る姿が日本の社会から消えた。

このような状況を憂え・・・「歩の衰弱」、「食の墮落」、「絆の崩壊」の 3 点を明示されたのが、同時であったのです。NPO 未来の事業展開の 1 コマではあったのですが、強烈な刺激を受けたことを覚えています。ここまで刺激的ではないにせよ、日本の至る所で言えることであったのです。「子どもの心身の問題」を捉えてしっかりと教育・保育の中に位置づけ、取り込んでいくことを専門家の方々から学んでいる途上であることを共有していただきたいと思うのです。

倉吉幼稚園の存在価値がそんなところにあることを・・・です。

<視点 7>外部発信を積極的に行い、外からの貴重な声を“振り返り”と“前進”への推進に変換していく職員集団の醸成を目指すということについて

《ポイント》学んだことは社会に還元していかなければならないと思います。

他園への啓発だったり、倉吉市へのアプローチだったり、学校への出前だったりをしていくことで、自分たちが取り組んでいることの“マップ広げ”が確実にできていくのだと思います。園の中で試行錯誤していることを世の中発信で確かめたり、子ども貢献できていると思ってきました。

- ① 「後追い測定」の定期的な実施は大きな意味があると捉えてきました。
- ② 「出前授業」も気づきのチャンスを提供するという意味で大きな意味をもってきたように振り返っています。卒園生に置き換えてみると“振り返り、思い出して…軌道修正する機会の提供”でもあると考えて向き合ってきました。
- ③ 内田先生が日本靴医学会会長をされていた時、お声掛けいただいて学術発表会で発表させていただいたことが契機となり、参加されていた先生方とつながることができました。
- ④ 日本シューズ協会とのつながりも小学校・中学校と成長していく園児の将来を見据えています。
- ⑤ 子ども家庭課塚根課長のご尽力で「子育てガイド」に靴の選び方を掲載していただき、資料提供いたしました。ファーストシューズ選び・履き方を心がけていただく契機になるようにとの願いを発信できました。
- ⑥ 市議会で朝日議員が市長・教育長への質問として本園の取り組みを紹介をしていただきながら、靴教育の大切さを取り上げていただいたことも非常に画期的なことだったと振り返っています。

<視点8>折に触れ、“仮説”に戻ることがを忘れない取り組みにすることについて

《ポイント》研究の取り組みには「仮説」がつきものです。雲をつかむようなスタートにあたり、4つの仮説を立てました。永遠のテーマのようなものでもあります。ずっと仮説とともに歩んできた訳です。その一つ一つと向き合いながら、大きな流れ・細かい部分の確認とともに更に高く・広く・深い仮説へと実践の積み重ねを！！

- 1 “土踏まずの形成”の取り組みを通した遊び込みは、子どもたちの体力・運動能力の向上につながり健康で根気強い子どもを育成していくことになるであろう。
- 2 “下あごの形成”の取り組みは、歯列や噛む力の問題をはじめ、子どもたちのもつ発達課題を少しずつクリアしていくことになるだろう。
- 3 家庭の連携を通したこれらの取り組みは、バランスのとれた心身の発達という面で、子どもの暮らしの変容を多く見届けることになるであろう。
- 4 基盤としてあった当園教育課程に準じた諸々の活動と“土踏まずと下あごの形成”の焦点化した取り組みが、子どもたちの健やかな身体によりよい生育となり、それらが子どもたちの豊かな心と言葉の育成につながるであろう。

3、おわりに

研究を継続していくことはとても「根気」「やる気」そして「本気」の要ることです。子どもたちの明るい未来を見据えながら、あらためて心ひとつにした“コロナを越える創意工夫満杯の取り組み”を目指してほしいと願っています。

(2021.11 西田 直美)

2 紙上対談（再掲）「ようちえんがだいすき紙上対談にて」

・日 時：2010年6月

・対談者：吉村 真由美 先生（金城学院大学教授 当時）

西田 直美 園長（倉吉幼稚園園長 当時）

●西田園長

私たちの取り組みに厚みが生まれてきたと実感することになったのは、先生との出会いです。足から靴へ視点を広げることになったからです。先生と靴教育との出会いをお聞かせください。

○吉村先生

もともとの私の専門は、被服分野の中の既製服サイズと体型の研究です。例えばサイズが同じ人でも薄っぺらな体型、厚みや凹凸のある体型と、人の身体にはさまざまな形がありますよね。しかし現在の既製服には残念ながら体型情報はほとんど反映されておらず、実際の人体の形と必ずしも適合していません。この不適合のせいで、衣服のかたちがなかなか身体に合わない、着心地が良くない、着たときのシルエットが崩れて美しくないなどの不具合が生まれます。このような不適合の問題を、足と靴の関係に応用発展させ、現在は足と靴の適合性に関する研究に力を注ぐようになったのです。

そして、最初は今から十年ほど前でしょうか。若い女性に大流行したミュールで私の大学の女子学生が、「転ぶ」「つまづく」「ねんぞする」「足は靴ずれで絆創膏だらけ」など。まさに満身創痍（まんしんそうい）で、ミュールを履いている。「そんなに傷だらけになっても何で履くの？」と聞けば、「だって可愛いからやめられないんだもん。」「先生、おしゅれは我慢なの。可愛くなるためならどんな苦勞もします。」との返事でした。日本人にとっての靴は身を飾るための道具でしかないという面を思い知らされ、これでいいのか？と大いに疑問を持ったのがきっかけでしょうか？

日本人を見渡してみても、若い世代はおしゅれが最優先。中年世代も社会的な立場を持てば、外見を優先せざるを得ません。そこで、考えねばならないのが、これからの世代の子どもたちと、足の衰えが始まる高齢者の世代です。どちらを先に改善するべきか、正直言ってとても悩みました。そして、「大人は自分の靴を自己責任で選ぶことができるし、今までの習慣を変えるのはとても大変」「子どもを対象とするなら、これから先の長い人生で使っていく子ども達自身の足の健康を、良い方向に大きく変えることができる。また、子どもは自分で靴を選んだり、履き方を身につけたりすることは出来ない。大人が守り育てていくべきものなので、子どもの方が急務だ。」と結論を出し、「子どものための靴教育」を始めることにしました。

●西田園長

靴が、下駄・草履の存在価値を奪いながら日本社会の隅々まで広がっていったのですが、その過程の中で「どこかで何か対策をとっていたら・・・」とか「遅きに逸した感」とか残念至極に思っていることがあれば、お聞かせください。

○吉村先生

そうですね。これは、どのような伝来のものにも共通していると思うのですが、伝わった当初に、正しい使い方までもが伝わることは難しかったでしょう。ご存じのように、日本には、日本独自の住宅様式や和服文化にピッタリ合った下駄や草履がありました。ですので、長い歳月をかけて培われた下駄や草履の履き物文化と、急激な洋風化とともに広がった靴とが、互いにせめぎ合って、

現在の日本の「靴習慣」や「靴常識」が生まれたのだと思います。

では、いつ対策を取れば良かったのか、という点ですが。最初のチャンスは、一斉に靴が日本の一般大衆に広まったと言われている、第二次世界大戦終了後の昭和二十年（一九四五年）以降でしょうか。ただし、まだ物資が不足していたこの頃に普及し始めましたので、子どもたちに靴が行き渡るきっかけは、配給や学校単位でズック靴が支給されるようになったことなどだったようです。ですので、品質もあまり良くなく、サイズも十分に合っていないものが、「初めての靴」だったと想像できますので、十分な対策は取りにくかったでしょう。

となると、その後ということになります。その後は靴にとっての大きな変革期はなかったように思いますので、誰かが言い出さなければきっかけが生まれず状況が続き、現在に至っている。そして、今、倉吉幼稚園で取り組まれている足を育てる取り組みなどが大きな推進力となって、日本の靴教育が大きく前進するタイミングが来ていると思います。ですので、まさに「今」がその時だと思います。

●西田園長

洋風化してきた社会への移行は、靴にとって「足を守ること」と「足を飾ること」の両方の役目を担ってきたと思いますが、現在のそのバランスの悪さについては仕方ないことなのですか。どうお感じですか。

○吉村先生

おっしゃるとおりです。以前、成人女性（20代～90代）を対象に、靴に機能性（足を守ること）を求めるか、デザイン性（足を飾ること）を求めるか、調査をしたことがあります。どんな結果が出たと予想されますか？若い人ほどデザイン性を重視していて、逆に高齢になるほど機能性を重視するようになると思いますよね？違うんです。結果の一部をご紹介します。80～98歳の女性は26名回答してくださったのですが、このお年寄りについて見てみたいと思います。誰もが、これだけのお歳になれば機能性を重視なさってデザインは気にしないのではないかとと思われる事でしょう。それが、機能性が最優先だとおっしゃる方は8名。3分の1にも満たない結果でした。また、どちらかといえばデザイン性よりも機能性を優先する方が、15名と半数以上と最も多く、どちらかといえば機能性よりもデザイン性を優先する方が三名もいらっしゃったことは驚きでした。対象が女性だったと言うこともあるかと思いますが、いくつになっても足を飾ることは捨てられない（笑）。この例からもお気づきのように、日本人にとっての靴は、足を飾る道具という色合いが強いのが現状で、その概念を、もう少し変えていただき、もっと足の健康の大切さを優先していただかねばならないと考えています。

●西田園長

靴履きスタートの乳幼児期を預かる我々ですが、健康診断で実に多くの「足の変形初期症状」を指摘されたことに驚きを禁じ得ません。と同時に、先生から教わったことを子どもたちの上に載せてみると納得でもあります。そのうち治るだろう・・・という心境にはとてもなりません。足・靴と共に歩いておられる先生、そんな出会いがございましたらお聞かせ下さい。具体的に陥りやすいトラブルがお聞きできるとありがたいのですが。

○吉村先生

日本では、足を専門とするお医者様が少ないと聞いています。また、教育者を対象とした足の健康や靴の知識を学ぶ教科もありません。先生といわれる方々がそのような状況ですので、保護者が正しい知識を学ぶ機会があるはずありません。

私が、足の医学的な面で教えを頂いている整形外科医の塩之谷香先生の元には、デザイン性重視の靴を履いていたことや、靴の不適切な履き方をしていることや、サイズの不適合（大きすぎる靴・小さすぎる靴）などで、怪我をしたり、足の痛みや変形を訴えて、外来を受診される親子が大変多いと聞いています。もちろん、塩之谷先生は、日本でもまだ珍しい「足と靴の外来」を開いておられる専門医なので、特にそのような患者さんが集まることもあるかもしれません。先生がおっしゃるには、ちょっとした知識があれば、大人が正しい導きをすれば、子どもの足を痛めずに済んだ事例ばかりだそうです。どんな親でも、子どもには健康に育って欲しいと願い、一生懸命育てているはずです。なのに、靴に関する誤った知識を子どもにも当てはめてしまったせいで、子どもの足を痛めてしまう。特に変形は一度なってしまったら直らないと言っても良いそうです。これは、子どもを取り巻く大人の責任以外の何者でもないと思いますし、知ること、学ぶことで避けられるなら、一刻も早く皆さんに知っていただき、子どもたちの足を守っていただきたい気持ちでいっぱいです。

その中で、一番簡単なことは、正しく履くことです。どんなに良い靴を履いても、サイズがピッタリ合っていない、履き方が間違っている、靴の機能性は正しく発揮されませんし、足を痛める一番の原因になります。

●西田園長

子育て真っ最中の保護者に向けて伝え続けることの責任を感じている我々です。お陰さまで本園の子どもたちの靴は、見事に「キャラ靴」から「足に合った靴」に変わりました。関心の高さと子どもを守る気持ちの大きさに感動を覚えました。先生の関わっておられる園・学校での啓発の例をお聞かせください。

○吉村先生

現在関わらせていただいていますのは、倉吉幼稚園さんの他に、名古屋市にある私立保育園や東京都にある公立（国立）中等教育学校、そして、私の勤めている大学などです。

まず言えることは、どの園や学校でも、積極的に協力してくださる先生の存在なしには、活動が始められませんので、その協力者探しから始まりました。そして、協力いただけるようになったところは、いずれも女性の先生が、理解を示し、これは大切なことなので、うちでも取り入れたいと思ってくださったことがきっかけになっています。また、どの先生もご自分が足を痛めた経験をお持ちでした。また、「どうしたらこの足のトラブルを回避できたのだろうか？」と強い疑問をお持ちだったと言う共通点があります。だからこそ、他人事ではなく、自分の問題として、足と靴のことをとらえて向き合ってくくださったことが大きかったと思っています。

この保育園では、長く「はだし教育」を続けておられたのですが、前任の園長先生から引き継いだ取り組みだったので継続しておられたとのこと。「なぜはだしが良いのか？」という事に関しては、改めて考えたこともなかったとおっしゃっています。しかし、靴との関わりについてお話しさせていただくと、「今まで何となく大切だとは思っていたけれど、誰からもちゃんと教わったことはなかった。改めて聞くと、とても大切だと実感できたので、はだしだけではなく、靴に関しても取り組みを行う事にした。」とおっしゃっていました。

中等教育学校の先生は体育科の女性の先生なのですが、ご自分の足が、日本の靴のサイズが規格に合わなかったことで、足が変形されたり、痛みがあったりと、とても辛い思いをされたそうです。ですので、「子どもたちの足の健康を守る取り組みなら、ぜひ取り入れたい。」と、積極的にご協力を頂いています。その学校では、研究活動を積極的になさっておられ、健康診断やスポーツテス

トで行う以外の項目についても生徒のさまざまな測定をなさっています。ですので、その一環として全校生徒（約 700 名）を対象に、毎年四月に足のサイズ測定を実施し、個々のサイズに基づいた適正靴サイズの提示を実施させていただいています。この取り組みも今年で三年目になりますが、生徒さんの多くが、自分のサイズの変化を観察して、興味を抱くきっかけとして役立っているようですし、生徒さん自身が自分の足のトラブルを知るきっかけにもなっているようです。

大学では、私が授業をしています。女性として将来役立つ知識の一つとして「靴教育」を紹介しています。未来の社会や家庭や子育てを支える立場の女性として、正しい足と靴の知識が本当は不可欠なものであるはずなのですが、今は一部のマスコミが単発的に流していたり、靴メーカーが自分の会社の製品の販売促進のための情報として、ホームページやパンフレットで扱うのが流行のようになっていたりしていますが、十分だとは言えません。私の授業では、それらの偏った情報で混乱しないよう、中立な立場で、正しい情報をシンプルに伝えるよう心がけています。また、幼児教育の学科もありますので、そこの学生には、未来の先生として、しっかりとした知識と意識を持ってもらえることに重点を置いて講義をしています。学生はみなとても興味津々で意欲的に受講しています。

●西田園長

その他何でも「靴と足に関する伝えこぼし」のことをお聞かせいただくと嬉しいです。

○吉村先生

始めにお話しした、靴教育との出会いの補足をさせてください。私がこれまで取り組んできた研究課題をご紹介します。これが、そのまま私の試行錯誤の歴史といえますか、靴の研究を重ね、今の靴教育の取り組みにたどり着いた軌跡なので、何がどう難しいのか。そして何から始めればいいのかという点について、理解を深めていただく参考にしていただければと思います。

（1）平成 15～16 年 日本学術振興会 科学研究費

子供靴選択時の意識と機能性に関する認識-日本とドイツの消費者および教育者の比較-

これは、日本の子ども靴文化を構築したいと考えたとき、何かモデルが必要ではないか？と考え、機能性に特化した靴作りが得意で、足の健康を国ぐるみで取り組んできたという歴史を持つドイツに焦点を当て、日本との比較研究を行ったものです。「靴の国」とも言われるドイツには、様々な伝統や工夫が根付いており、国民の生活の中で生かされていました。調査するたびに新しい発見があり、ワクワクしながら取り組みました。また、2 年間の調査ではとても時間が足りず、次の研究でもドイツの調査は行っています。

（2）平成18～20年 日本学術振興会 科学研究費

子どもの足サイズ計測の必要性-学校保健統計調査で靴によって起こるトラブルを防ぐ-

前の研究での結果から、日本では、消費者とメーカーの間に、子ども靴はすぐに小さくなるのでお金を掛けたくない。でも良い靴は履かせたい。という消費者の意識や願いがあることがわかりました。また、子ども靴メーカーはメーカーで、いくら良い靴を作りたいとしても売れなければ絵に描いた餅。日本の消費者が子ども靴に掛ける金額の相場「二千百円の壁」がある限り、良い靴は作れない。という、どうにも崩せない関係があることがわかりました。この関係は、どちらかを大きく崩さない限り、動かすことは難しいという結論を出さざるを得ませんでした。では、買う側の理屈も、売る側の理屈も、簡単には動かせそうに

ないのなら、せめてサイズだけでも正しく選べる環境を作れないか？と視点を変え、園や学校の身体測定に足のサイズ測定を組み込み、全国一斉に保護者に知らせ、正しい靴サイズを選んでもらうのに役立ててもらおうと考えて、サイズ測定に関する取り組みを行うことにしました。この研究でも、靴を買いに行けば、まず足のサイズを測ってから靴を買うのが当たり前というドイツに赴き、調査を行いました。

(3) 平成 21～23 年 日本学術振興会 科学研究費

子どもの足の健康を目指した「靴教育」の実践—靴によって起こるトラブルを防ぐ—

前の研究で、学校の現場の身体測定に足の項目を加えることを目指して取り組んだのですが、現場の壁の厚さにぶち当たりました。その壁の正体は、先生方の「無知識」「無理解」の生んだ「無意識」でした。私は、子どもを導き育てる立場である教師であれば、誰でもこの問題の大切さを簡単に理解出来るだろうし、協力も得やすいのではないかと考えていました。しかし、実際に活動を行ってみると、大違いでした。先生の意識レベルも知識も、一般の市民と全く同じなのです。そこで考えました。いくら先生だからといって、どこでも教わらないことは知り得るはずがないし、子どもたちや保護者を教えることは出来ないのだから、仕方がない。だったら子どもを取り巻く大人全員に。先生も含めて教育を行えば、問題がすべて解決するのではないかという結論に達したのです。

この研究に移ってからの周囲の理解の早さは、これまでの研究と比べものにならないほどでした。シンプル・イズ・ベスト。わかりやすさは、教育の原点だということも学びました。そして、今はこの研究に夢中で取り組んでいます。

この研究の最終目標は、教育指導要領に靴教育を組み込んだり、幼児教育や保育の場で、正しい靴教育を行うシステムを整備したりと、全国一斉に子どもたちに靴教育が行われるための制度作りをすることです。また、それを支える、家庭と、園や学校が車の両輪となって協力し合い、子どもの足の健康作りを進める社会が構築され、日本中の子どもたちの足の健康を守ると取り組みが、一日も早く実践されることです。

このように、夢は大きいのですが（笑）。倉吉幼稚園での取り組みが、日本の最先端の進んだ取り組みとして評価され、そのさがけとして全国に向けて発信されることに大いに期待しています。

3 追加データを含めた一覧

①測定記録シート

[illegible]

③体育あそび指導計画

令和 4 年度 体育あそび指導計画 (年少)		動き
	●サーキットあそびを中心に行いながら、ポイントで補助を行う。 ○全身運動 ・宙の合図で壁に曲がる直ぐ走る(コースでコース作り) ・順路による ・閉鎖コースを走る(途中でワザサ、カンガルージャンプをする) ○マット運動 ・補助付き転転、前転、ブリッジ(お尻を上げる) ・ムムシコロコロ、えびひつコロコロ、返道コロコロ ・2人でえびひつコロコロ、2人でベンギン ○跳び箱運動 ・発ごてジャンプ、跳び箱ワザサ ○鉄棒運動 ・トンネルくぐり(マットお)、ぶら下がり ○フープ運動 ・垂直ジャンプ、片足ジャンプ ○平均台運動 ・波型平均台(前向き、横向き、後向き)平均台 ○積木 ・積木作り、積木ひし、張り	
5月・6月		              
7月	○ボールあそび ・膝立ち、ワニ歩き ○運動会に向けての取り組み	              
8月	○走る ・真一直ぐ、ジグザグに、ジャンプしながら ○マット運動 ・前転、ブリッジ(お尻を上げる) ○跳び箱運動 ・高い所からジャンプ、川越ワザサ ○鉄棒運動 ・色々な握りで自分の力ぶら下がり(順手、逆手、横手) ・跳び箱フット、プクア飛来、ジャンプのり、こりうらへ後ろお ○平均台運動 ・前に進むー2本で左右向きに生で、1本で補助をしてもらいながら ・真ん中で生で ・横向きに生で、真ん中で向きを変える ○ボール運動 ・転がすー先生に向かって、壁際に向かって(2人で)、転がしドッジ ・投げるー壁に向かって、目標物に向かって(距離)	              
10月・11月・12月	○走る ・スピードをコントロールしながら ○フープ運動 ・ケンケンパ ○マット運動 ・前転、ブリッジ(お尻を両手で上げる)、片足手押し車 ・両足手押し車 ○跳び箱運動 ・順路ジャンプ着、跳び箱ワザサ、川越ワザサ ○鉄棒運動 ・こり、おふんこ、前回り ○平均台運動 ・前に進むー真ん中で(向きを変える、片足でバンス、回る) 基本的な補助なしで行う ○ボール運動 ・転がす、投げるー転がしドッジ、釣的でゲーム ・受けるー上から落とすときキャッチ、ハウンドキャッチ ・蹴るー壁に向かって蹴る	              

②咀嚼力判定

判定ガム判定表(色の変化による判別)

色					
評定	1	2	3	4	5

ロツテキシリトル咀嚼力判定ガム



④体育あそび項目・段階別指導計画

体育あそび 項目・段階別指導計画						
	ホップ	獲得される動き	ステップ	獲得される動き	ジャンプ	獲得される動き
マット①	くまさんジャンケン		階段でんでり送り		でんでり送り	
マット②	でんでり送り		フープでんでり送り		飛び込み回転	
秋林①	でんでり送り		とびつとダーチャキペー		前回り降り	
秋林②	前回り降り		懸垂かけっこ		前回りブランコ	
秋林③	前回りブランコ		前回りブランコ逆上がり		逆上がり	
平均台①	横上歩行		平均台より下り歩き		平均台一本横走り	
平均台②	ロープ左右結び		平均台左右結び		平均台回転	
雲梯	お尻ふりふり		たぐり送り		振り振り	
跳び箱①	跳び箱クサギ		片越うすび		両脚結び (1～3歳)	
跳び箱②	飛び降り開脚結び		連続開脚結び		両足開脚結び	

⑤アサヒフットグラフィアー足型測定シートの見方

[illegible]

4 取り組みのベースにしているマップ等

①幼児期に身につけたい「動き 36」



②打吹山感性の地図



③うつぶきやまかるた



④「すーちゃんと うつぶきやまうつぶきやま」 (絵本)



⑤くらっぴいうつぶきやますごろく



《研 究 同 人》

《2021 年度》

○米村 秀昭	○西田 直美	○日野 彰則	○落合 和美	○小谷 直美
○石賀 浩美	○海地 恭子	○倉恒 里美	○林 友里	○矢吹 真輝
○後藤亜裕美	○新藤 秀利	○中村 麻美	○伊藤麻侑子	○牧田 由紀
○小湯原麻樹	○船木 梓	○森 知佳	○牧田 文子	○松本 万弥
○西田ゆかり	○石田かおる	○寺谷 梨江	○野儀奈保美	○林 奈稚
○西古かおり	○槇浦 美香	○倉光恵利子	○山田 倫子	○岩佐 淑江
○山崎 あい	○平野 里美	○中川 麻代		

《2022 年度》

○米村 秀昭	○西田 直美	○日野 彰則	○落合 和美	○小谷 直美
○石賀 浩美	○海地 恭子	○倉恒 里美	○林 友里	○矢吹 真輝
○後藤亜裕美	○新藤 秀利	○中村 麻美	○伊藤麻侑子	○小湯原麻樹
○船木 梓	○松本 万弥	○槇浦 美香	○森 知佳	○牧田 文子
○西田ゆかり	○石田かおる	○寺谷 梨江	○野儀奈保美	○林 奈稚
○西古かおり	○倉光恵利子	○山田 倫子	○山崎 あい	○中川 麻代
○岩佐 淑江	○平野 里美			

第 1 2 回 自主公開研究発表会

研究の足あと

2022年7月2日 初版第1刷発行（150部）

発 行 元：学校法人倉吉幼稚園

認定こども園倉吉幼稚園

〒682-0824 鳥取県倉吉市仲ノ町742番地1

電話 0858-22-4680 FAX0858-22-4677

URL: <https://kurayo.net/>

e-mail: info@kurayo.net

印刷・製本：有限会社矢積印刷

転載される場合は、本園までご連絡ください。



くらよし幼稚園